

高松市埋蔵文化財調査報告第42集

しせき たか まつ じょう あと
史跡 高 松 城 跡

(地久櫓跡・三ノ丸跡)

史跡高松城跡整備に伴う埋蔵文化財調査報告書

1999. 3

高松市教育委員会

序 文

高松市のシンボルとでも言うべき高松城、1588(天正16)年に生駒親正によって築城され、400年余りが過ぎました。天守閣は現存しませんが、石垣や櫓などに往時が偲ばれます。現在、高松城跡は国の史跡指定を受け、玉藻公園として市民の憩いの場となるとともに、その城下町はアーケード街などの商店街として今に活きづいています。高松城築城時は、高松の中心部は野原郷と呼ばれ、その名のとおり、人のあまり住まない野原でした。古代讃岐では内陸部に官道が通り、役所などの行政機関が存在しましたが、海辺に城を築き、港を築き、城下町を築くことによって、高松の発展の礎となったのです。いわば、ウォーターフロント開発でした。

ところで、現在高松市では、次世代のウォーターフロント開発として高松港頭地区の再開発を行っております。また、一方では、本市の貴重な歴史遺産である高松城跡の整備を行い、地域の自然風土や歴史文化の特性を踏まえた特色ある町づくりを進めています。その整備の各段階において計画的に調査を行い、実体を明らかにしながら整備を進め、将来に息づく歴史的遺産として、また、憩いの場としての活用を図りたいと思っています。

近年、文化財の調査成果は歴史分野のみならず、環境保護、防災、都市計画などのあらゆる分野に活用されるようになりました。発掘現場では気候や植生などの古環境、干拓や造成などの土地利用、条里溝や道路などの都市計画、地震や洪水などの自然災害、自然に対して畏敬の念が込められた祭祀行為など多彩な情報が得られます。地中には先人が残した様々なメッセージ残っているのです。これらの情報を単に歴史的情報として見るだけでなく、積極的に現在の生活あるいは将来に向けて活用していくこそ歴史の意義であり、私たちに課せられた使命であると考えます。

今後も歴史から多くを学び、高松城のように今後数百年の礎となるような町づくりを進めていきたいものです。

平成11年3月

高松市教育委員会

教育長 山口 察式

例　　言

1. 本書は高松城跡のうち史跡整備事業の事前調査として実施した地久櫓と三ノ丸部分の試掘調査報告を収録した。また、関連遺跡として高松城西内町（香川県高等学校P.T.A会館）地点と内町（三越増床）地点の2調査分を付編として収録した。
2. 本報告書に掲載された遺跡の調査及び整理作業は、平成9・10年度において文化振興課文化財専門員山本英之・大嶋和則があたった。それぞれの調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。

	調　　査　　地	調　　査　　期　　間	面　　積　(m ²)	担　　当
地　久　櫓	高松市玉藻町	平成9年12月3日	4	大　嶋
三　ノ　丸	高松市玉藻町	平成10年7月8日～8月11日	14.25	山　本
P.T.A会館立会	高松市西内町	平成9年7月10日	47	大　嶋
三越増床試掘	高松市内町	平成10年4月16日	65	山　本

3. 本報告書の執筆は山本・大嶋・川部が行い、編集は大嶋が行った。執筆分担は次のとおりである。

山本 …… 第3部第1章・第2章・第4章、付編第2部

大嶋 …… 第2部、第3部第3章、付編第1部

川部 …… 第1部

4. 現地調査および遺物観察にあたっては下記の機関及び方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

文化庁　香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

財団法人松平公益会　高松市公園緑地課

東　信男（丸亀市教育委員会）　片桐孝浩（財団法人香川県埋蔵文化財調査センター）

塩崎誠司（香川県教育委員会）

5. 現地調査から整理作業および報告書作成に至るまで下記の方々の協力を得た。

末光甲正・中西克也（讃岐文化遺産研究会）　山内康郎（徳島文理大学大学院）

十河佐千子（香川大学）　大野宏和・川部浩司（花園大学）

6. 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

S D 溝　　S K 土坑　　S P ピット

7. 本文の挿図中で国土地理院発行の2万5千分の1地形図「高松北部」「高松南部」を一部改変して使用した。

目 次

序 文

例 言

目 次

第 1 部 地理的歴史的環境	1
第 2 部 地久櫓	7
第 1 章 調査の経緯と経過	8
第 2 章 調査の成果	8
第 3 章 まとめ	8
第 3 部 三ノ丸	23
第 1 章 調査の経緯と経過	24
第 2 章 調査の成果	27
第 3 章 遺物について	38
第 4 章 まとめ	46
付編第 1 部 香川県高等学校 P T A 会館立会	59
第 1 章 調査の経緯と経過	60
第 2 章 調査の成果	60
第 3 章 まとめ	66
付編第 2 部 三越増床試掘	71
第 1 章 調査の経緯と経過	72
第 2 章 調査の成果	72
第 3 章 まとめ	72

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	4
第2図	調査地位置図	6
第3図	地久櫓平面図	9～10
第4図	A面立面図	11～12
第5図	B面立面図	13～14
第6図	C面立面図	15～16
第7図	断面図(A, B-1, B-2)	17～18
第8図	断面図(C-1, C-2, D)	19～20
第9図	石垣北面試掘部立面図	21
第10図	石垣北面試掘部立面図	21
第11図	試掘部北壁土層断面図	22
第12図	調査地点位置図	25～26
第13図	A地点土層略図	28
第14図	A地点遺構平面図	29～30
第15図	A地点埋没石垣北側壁面図	31
第16図	A地点埋没石垣南側壁面図	31
第17図	A地点西拡張区埋没石垣構断面図	32
第18図	B地点土層図	32
第19図	B地点遺構平面図	34
第20図	B地点現存石垣壁面及基底部土層図	34
第21図	C地点土層図	35
第22図	C地点遺構平面図	36
第23図	C地点現存石垣壁面及基底部土層図	37
第24図	A地点上段石垣出土遺物実測図	39
第25図	A地区下段石垣裏込出土遺物実測図	40
第26図	A地区西拡張区出土遺物実測図	41
第27図	A地区西拡張区出土遺物実測図	42
第28図	C地点埋没石垣裏込出土遺物実測図①	43
第29図	C地点埋没石垣裏込出土遺物実測図②	44
第30図	C地点下層出土遺物実測図	45
第31図	調査区平面図	60
第32図	トレンチ北壁土層断面図	61
第33図	S D-01土層断面図	61
第34図	S K-01土層断面図	62

第35図 S K - 01出土遺物実測図①	63
第36図 S K - 01出土遺物実測図②	64
第37図 S K - 01出土遺物実測図③	65
第38図 包含層出土遺物実測図	66
第39図 調査地位置図	73
第40図 トレンチ西壁土層断面図	75~76

第1部 地理的歷史的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており、そのため侵食解析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）あるいは孤立丘（ピュート）となっている。西側の五色台は、平坦な頂部をよく残しており、屋島もまた同様に解析から取り残された台地である。東側の立石山山地はこれらより解析が進んでおり、紫雲山・白山・由良山など多数の孤立丘とともに高松平野の自然景観を特徴付けている。

高松平野は、これら侵食が進んだあと、沖積世に入ってから堆積されて形成されたもので、讃岐山脈から流下し、北へ流れ瀬戸内海へ注ぐ香東川を主体として本津川・春日川・新川などによって搬送された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。

高松城は、高松平野（沖積地）の先端に位置し、現在の高松市街地は城下町として発展してきた。市街地形成前の旧地形は、石清尾山塊の東麓に所在する栗林公園（藩主松平氏の庭園）の周辺地名に「室町」があることから、この付近まで入り海であったと考えられる。このことは、南海通記の『讃州高松府記』に、「香河郡笠原郷に究境の地あり、住古より河水の流れ久しく海中に入りて地より八町沖に白砂集まり、須賀を生じ野原の庄に相続き、西浜・東浜とて漁村有り、又郡中に山ありて南北に横たわる。（中略）この山大江の東なれば江東のはなという也。この山と西浜の中間潮入りにて坂田室山の下まで入り海也。東方野口坂田中河原まで潮のさし引きあり、中筋十八町白砂海中に入ること一筋の矢のごとし、故に笠原と名付也。」とあることからも伺える。

近年の都市化の波に市街地は郊外に広がり、道路網の整備等、内陸部にも開発の区域が広がっており充実してきたといえる。

高松平野では、昭和60年代に入って高松東道路建設・太田第2土地区画整備事業・空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い、埋蔵文化財の確認調査ならびに発掘調査の件数が飛躍的に増大したことにより、遺跡数も増加の一途を辿っている。今後、未確認遺跡の把握と保護に加えて、これまでの調査成果を時間的・空間的に結び付けて高松平野の歴史的環境の変遷を復元する作業が新たに必要となっている。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代に遡り、久米池南遺跡、雨山南遺跡等の遺跡が知られている。

縄文時代については、大池遺跡が以前から報告されており、また、近年平野部の発掘調査によつて縄文時代を中心とした遺跡確認例の増加が際立っている。

弥生時代になると、前期の遺跡は小範囲にかたまって点在しており、中期には遺跡の規模が増大し、平野縁辺部や丘陵上には高地性集落が営まれるようになる。後期になると遺跡の数、規模共に爆発的に増加する傾向が見られる。

古墳時代では、弥生時代後期から古墳時代初期に至るまで集落が存在している遺跡もあり、弥生から古墳への過渡期を示す資料を知ることができる。また、古墳時代全般を通して集落・生産遺跡の遺跡数は希薄であり、このことは、古墳の造営が全市域的に盛んであるとの対照をなしており、今後古墳の造営母体となるべき集落域の解明が重要な課題となるものと思われる。古墳としては、発生期と考えられる鶴尾神社4号墳などを皮切りに、石清尾山塊では猫塚・石船塚等から成る前期の古墳として有名な石清尾山古墳群が築造された。その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

古代では条里遺構と古代寺院跡が注目される。条里機構の多くは古いものでも平安時代から鎌倉時代、多くは近世以降の遺物を含み一般に条里の施行期とされる奈良時代とは時期的に隔たっているが、溝の存続期間と遺構としての埋没時期の関係など、検討すべき多くの問題をはらんでいる。古代寺院跡としては、寺院跡の中のいくつかには地域単位の後期古墳群の分布と一致する傾向が強いことから、古墳時代後期から古代への転換期に地域単位の造墓集団が寺院建築への転向を図ったものと考えられる。

中近世以降では、旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が見られる出土検出例があり、その後現在に至るまで存続して水田層の堆積が確認されることから、この時期までに現在の地形環境がほぼ形作られていたことが推測される。また、平野部北側に所在する遺跡の希薄性から見れば、栗林公園－松綱－古高松あたりが旧海岸線として少なくとも奈良時代頃まで同一の地形を呈していたと考えられる。しかし、旧海岸線は徐々に陸地化が進んで行くのであるが、平安時代末期に範原郷と呼ばれた皇室御領の莊園安楽寿院領となり、鎌倉時代には大覚寺の莊園となつたとされている地は、徐々に中洲が発達していったことが考えられる。

豊臣秀吉の四国征伐により、天正13年（1585）長曾我部元親が降伏し、讃岐は仙石秀久・十河存保に与えられ、その後尾藤知宣の領国となったが、天正15年（1587）生駒親正が入封し、讃岐17万石を領した。高松城は、翌天正16年（1588）から築城を開始し、数カ年を要して完成させた大規模な水城であり、城の南側には城下町が形成された。築造は、地形状況から安定した中洲を利用しておらず、ある程度の土盛造成で城郭を形成しうるまで中洲の発達が見られる。高松城は、北の守りを内海にゆだね、南方に大手（旧太鼓門）を構えて城下町が展開する「後堅壁」の典型的な水際城である。堀には海水が導かれ、天守閣・二ノ丸・三ノ丸・帶曲輪などの配置は城郭史上特色のあるものである。

寛永19年（1642）には生駒氏に代わって讃岐に入封した松平頼重が、城郭の改修・新築を行っている。これらの造成によって三ノ丸は北と東へ拡張し、東ノ丸が造成によってできたのが月見櫓・続櫓・水手御門・渡櫓等であり、水手御門から直接海への出入りができるようになっていた。しかし、明治37年（1904）の埋立により、高松城の北側は海から離れてしまうという状況になり、現状では、本丸・二ノ丸・三ノ丸・桜馬場・内堀・中堀の一部しか残されているにすぎない。

高松城の発掘調査は、高松市教育委員会をはじめ、香川県教育委員会や財團法人香川県埋蔵文化財調査センターによって、現在まで17次を数える。中でも本書は三ノ丸・地久櫓・武家屋敷等の数々の遺構・遺物を検出する成果を含んでいる。また、紺屋町遺跡等の発掘調査により、城下の町屋の一端を知る上でも貴重な資料を提供しており、これらの地道な調査によって、高松城及び周辺の状況が小規模ながらも明確になってきた。しかし、まだ不明な点も多く、更なる調査研究が必要としているのが現状であり、今後の調査成果に大きく期待したいものである。

引用文献

- 香川県教育委員会『高松城東ノ丸跡地発掘調査報告書』1987.3
- 高松市教育委員会『史跡高松城』『高松市文化財調査報告書』1991.3
- 高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査』1992.3
- 高松市教育委員会『境目・下西原遺跡』1998.3



第1図 周辺遺跡分布図

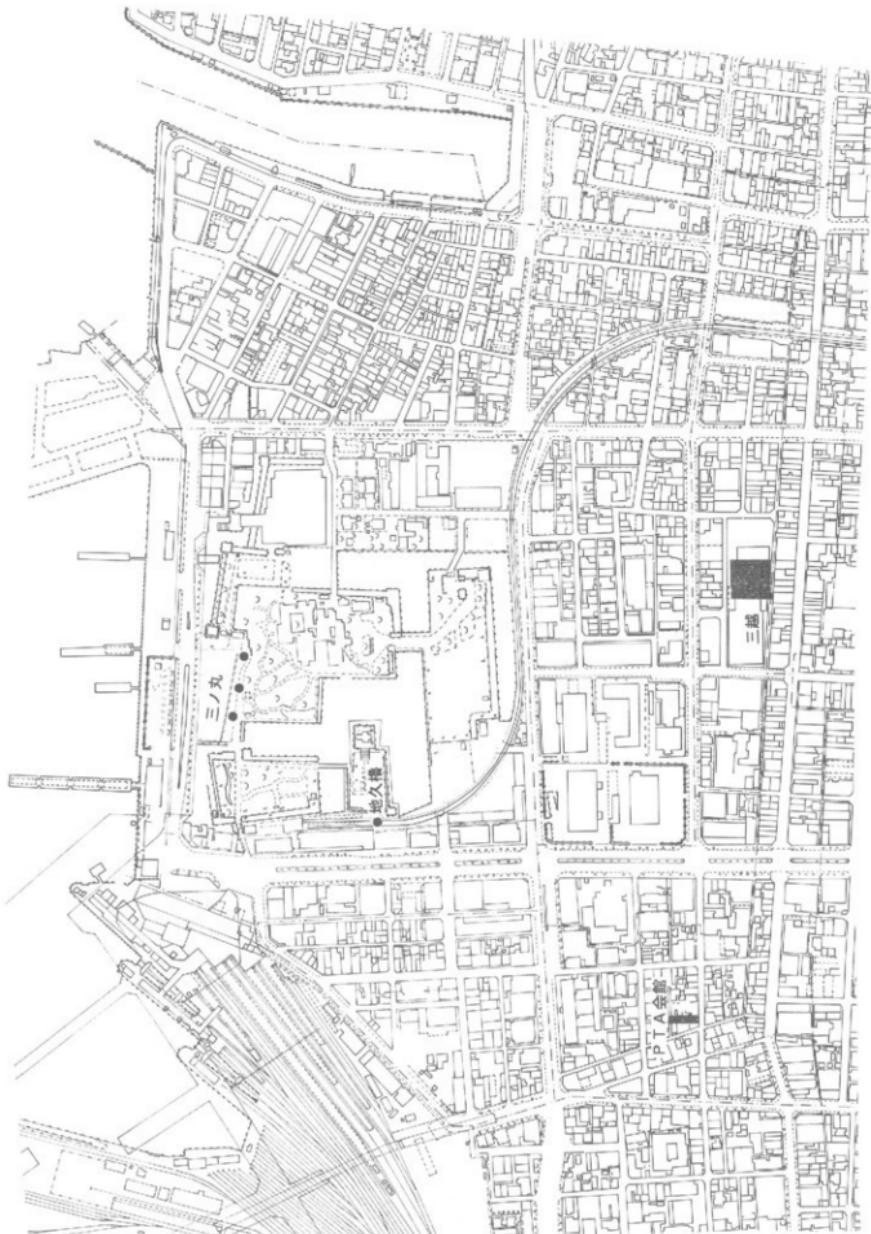
- | | | | |
|---------------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 史跡高松城跡 | 2. 紺屋町遺跡 | 3. 中ノ村城跡 | 4. 北大塚北方1号 |
| 5. 石船塚古墳 | 6. 石船塚東方古墳 | 7. 稲荷山3号墳 | 8. 稲荷山2号墳 |
| 9. 稲荷山5号墳 | 10. 稲荷山北端1号墳 | 11. 稲荷山北端2号墳 | 12. 稲荷山北端3号 |
| 13. 稲荷山北端4号墳 | 14. 稲荷山姫塚古墳 | 15. 稲荷山4号墳 | 16. 稲荷山1号墳 |
| 17. 奥ノ池1~23号墳 | 18. 室山城跡 | 19. 松並中所遺跡 | 20. 西ハゼ土居遺跡 |
| 21. 東中筋遺跡 | 22. 鹿原遺跡 | 23. 天満宮西遺跡 | 24. 松縄城跡 |

高松城跡調査一覧表

調査期間	調査原因	調査面積	調査地	概要	調査機関	文献
1 1956. 3. 31 1956. 10. 8	重要文化財 高松城 修理工事	—	水手御門 高手御門	水手御門の礎石および海手御門の礎石・蹴放石・葛石・排水暗渠を検出。	高松市	1
2 1960. 2. 16 1990. 3. 31	史跡高松城 保存修理工事	—	袖機	鞍馬南入口と石垣間に木樋を検出。	高松市	2
3 1954. 2. 9 1964. 3. 31	史跡高松城 保存修理工事	—	内堀石垣 中堀石垣	石垣裏込に急石および鳥居を転用。	高松市	3
4 1985. 4. 15 1986. 5. 31	県民ホール	6,047	米蔵丸	邊塁用石垣(下側石垣)、礎石物跡や東門縁跡の先端部分および溝状石組などを検出。	香川県教育委員会	4 5
5 1990. 5. 14 1990. 5. 5	玉藻公園 整備事業	540	水手御門	遺構の範囲確認調査であり、水手御門から海に出る附段遺構を検出。	高松市教育委員会	6 7
6 1994. 4. 18 1994. 6. 30	県立歴史博物館	1,000	東ノ丸堀	江戸時代後期の石列状遺構・礎石群や石組み溝状遺構・石室状遺構および推定中庭に曲する石垣などを検出。	香川県埋蔵文化財調査センター	8 9
7 1995. 2. 7 1995. 3. 31	公民ホール 小ホール	225	艮櫓台	突堤および以輪台石垣根石などを検出。	香川県教育委員会	8
8 1995. 4. 1 1996. 3. 31	県立歴史博物館	5,000	東ノ丸	礎石建物跡・石列状遺構・石組み溝・井戸・水溜状遺構などを検出。	香川県埋蔵文化財調査センター	10 11
9 1995. 12. 1 1996. 3. 31	高松港頭土地区画整理事業	900	大久保家	大久保家の礎石建物跡・石組み溝・牛躰・松平初期にかけての礎石建物跡・廻廊などを検出。	香川県埋蔵文化財調査センター	10 11 12
10 1996. 4. 1 1997. 3. 31	高松港頭土地区画整理事業	3,639	武家屋敷	屋敷地割の変遷と屋敷地内遺構の構造を、屋敷毎に明瞭なかたちで確認した。また検出遺構と絵図に一定の対応関係が指摘できる。	香川県埋蔵文化財調査センター	13 14 15
11 1997. 6. 2 1997. 7. 29	高松港頭土地区画整理事業	300	武家屋敷	石組み井戸・土坑・溝・住穴および中世前期の貼石を伴う落ち込みを検出。	香川県埋蔵文化財調査センター	16 17
12 1997. 7. 10	香川県立高等学校PTA会館	47	武家屋敷	幕末期の溝・土坑・住穴などを検出。土坑内には焼けた瓦が多量に廃棄されていた。	高松市教育委員会	本書
13 1997. 11. 17 1997. 12. 26	財松平公会議事務所改築	300	作事丸	築地塀基礎跡や礎石建物などを検出。	高松市教育委員会	18
14 1997. 12. 3	玉藻公園 整備事業	4	地久櫓	地久櫓の石垣基底部の調査を行ったが、不明なまま調査を終了。幕末～明治の遺物しか出土していない。	高松市教育委員会	本書
15 1998. 3. 1998. 6.	高松北警察署	1,000	武家屋敷	詳細不明	香川県埋蔵文化財調査センター	未報告
16 1998. 4. 16	三越増床	65	武家屋敷	近現代の戦乱のため残存状況は悪く、遺構についても明治の物であったため保護措置の必要性はないと判断した。	高松市教育委員会	本書
17 1998. 7. 8 1998. 8. 11	玉藻公園 整備事業	14	三ノ丸	現状の石垣の内側80~90cmにおいて埋没石垣を検出。	高松市教育委員会	本書

<文献一覧>

1. 高松市『重要文化財高松城二ノ丸月見櫓横櫓渡舟水手門修理工事報告書』1957.3
2. 高松市『史跡高松城保存修理工事報告書』1960.3
3. 高松市『史跡高松城保存修理工事報告書』1964.3
4. 高松市『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』1987.3
5. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年と6年』1988.3
6. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成2年度』1991.3
7. 高松市『高松城跡調査報告書』1991.3
8. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』1995.3
9. 香川県埋蔵文化財調査センター『香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成6年度』1995.5
10. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』1996.3
11. 香川県埋蔵文化財調査センター『香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成7年度』1996.5
12. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度埋蔵文化財発掘調査概報』1996.3
13. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』1997.3
14. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度埋蔵文化財発掘調査概報』1997.3
15. 香川県教育委員会『財松平公会議事務所改築工事』1998.6
16. 香川県教育委員会『高松港頭土地区画整理事業』1998.6
17. 香川県埋蔵文化財調査センター『財松平公会議事務所改築工事』1998.6
18. 高松市教育委員会『財松平公会議事務所改築工事』1999.3



第2図 調査地位置図

第2部 地久櫓跡

第1章 調査の経緯と経過

地久櫓は高松城本丸の南西隅に位置する。生駒親正によって築かれた高松城の創建当初から見られる櫓である。現在では堀の一部が埋め立てられ、櫓の西側に堀は見られない。

地久櫓の石垣には隣接するように琴電の線路が敷設されており、さらにその西隣には国道30号線が所在する。電車および車の振動により石垣にひび割れやはらみを数多く見ることができる。高松城の石垣のうち最も危険な状態となっており、今後放置しておくと崩壊する恐れもあるため、その保護措置を検討している。そのための事前調査として埋没部分の石垣および基底部の状況を確認するために試掘調査を行った。

調査地は琴電高松築港駅のプラットホームの南端に位置し、高松城跡の本丸東城壁で地久櫓の北側、内掘部分に相当する。線路やプラットホーム等の構造物が所在するため、2m×2mの小規模な範囲について調査を行った。掘削中に地久櫓南側の内掘より石垣の隙間を通りぬけて海水が流入する事が判明し、千潮を待って調査を再開したため夜間の調査になった。

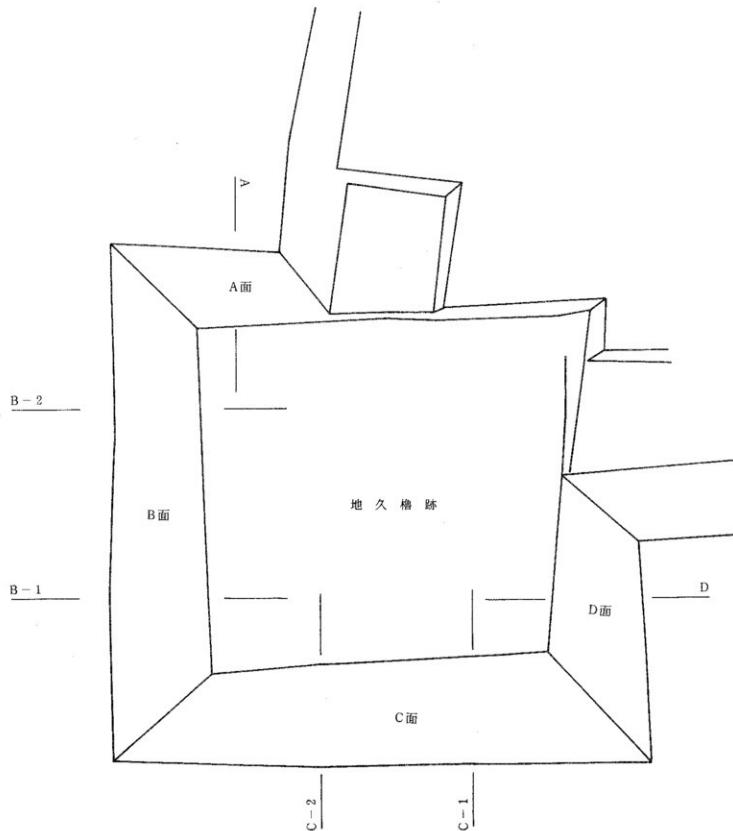
第2章 調査の成果

調査範囲が狭く湧水が多いため、掘削に法面をもたせることになり、現地表面下約2.5mの深さまでしか確認することができなかった。2.5m以下は貝殻混じりの砂地となっており、地山の可能性も考えられたが、平面的には20cm四方程度しか確認することができず、石垣の基底部は不明である。また、当初期待された石垣基底部の基礎構造（木材等）についても確認には至らなかった。

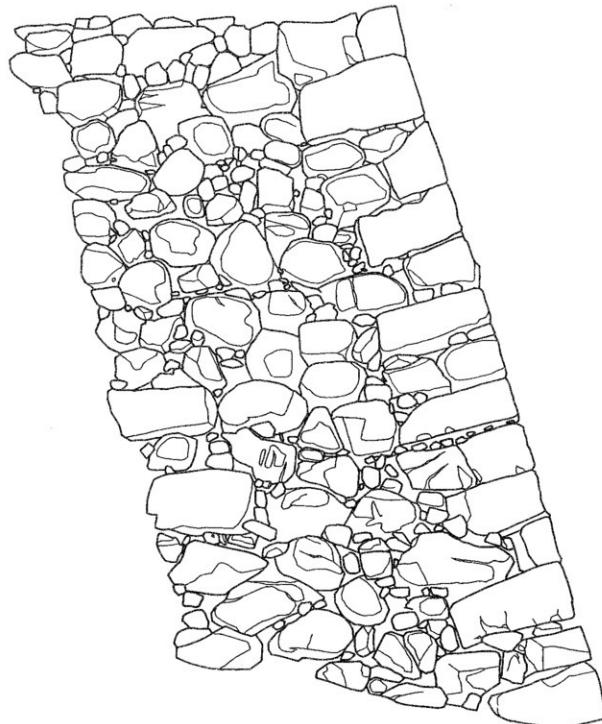
掘の埋土は地表面下約80cmまでは現代の客土層で、以下は粘質シルトおよび砂混粘土層であった。埋土からコンテナ2箱分の瓦等の遺物が出土したが、下層まで全て幕末～明治のものであった。また、埋土中には30cm～1mにもなる石材が数多く検出されており、明治期の埋め立て時に石垣上部の石材の投棄が行われたことも予想できる。

第3章 まとめ

今回の調査は小規模で、不明な点が多い調査であった。石垣の基礎部分の確認は行えなかったが、地下部分の石垣については比較的良好な状態を保っていることを確認した。遺物については2.5m掘削を行ったが、幕末～明治にかけての遺物が一貫して出土した。築造時期を表すような遺物は1点も出土しておらず、地山らしき砂層の検出はできたが基底部はさらに深くなることも予測される。

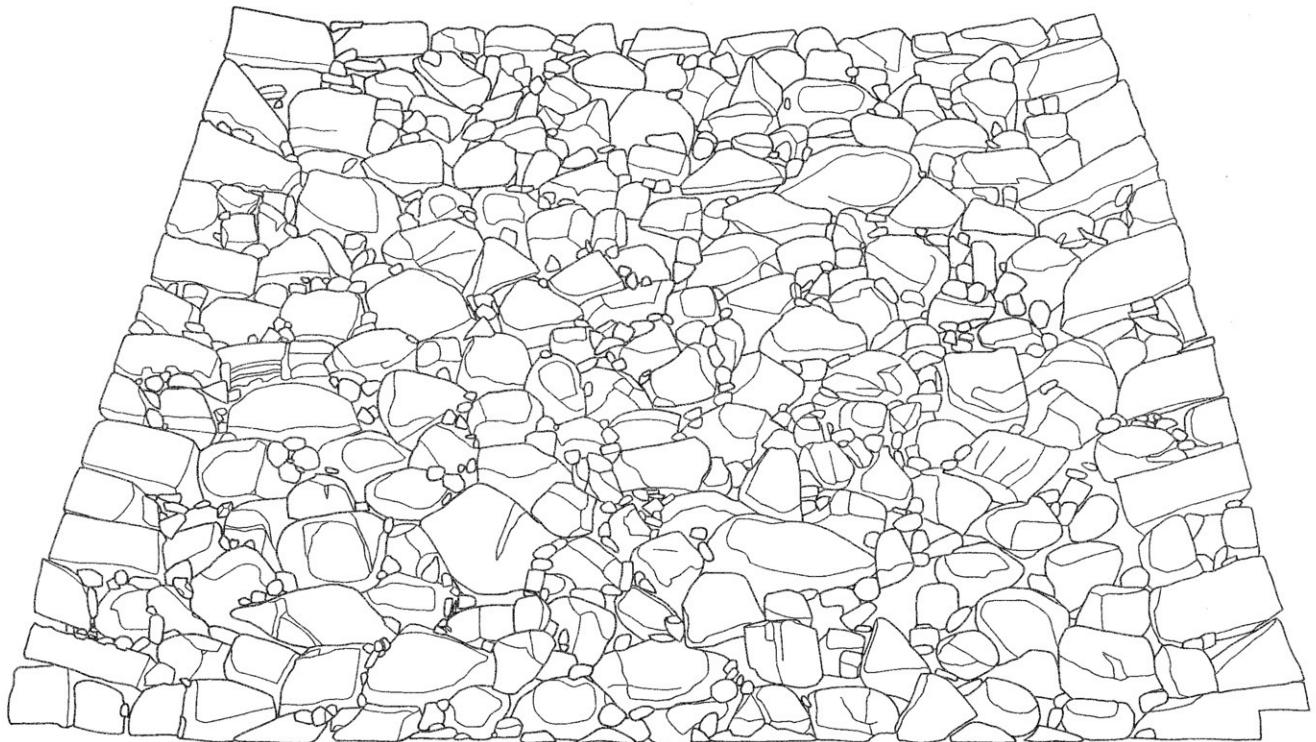


第3図 地久樋平面図 ($S = 1/50$)



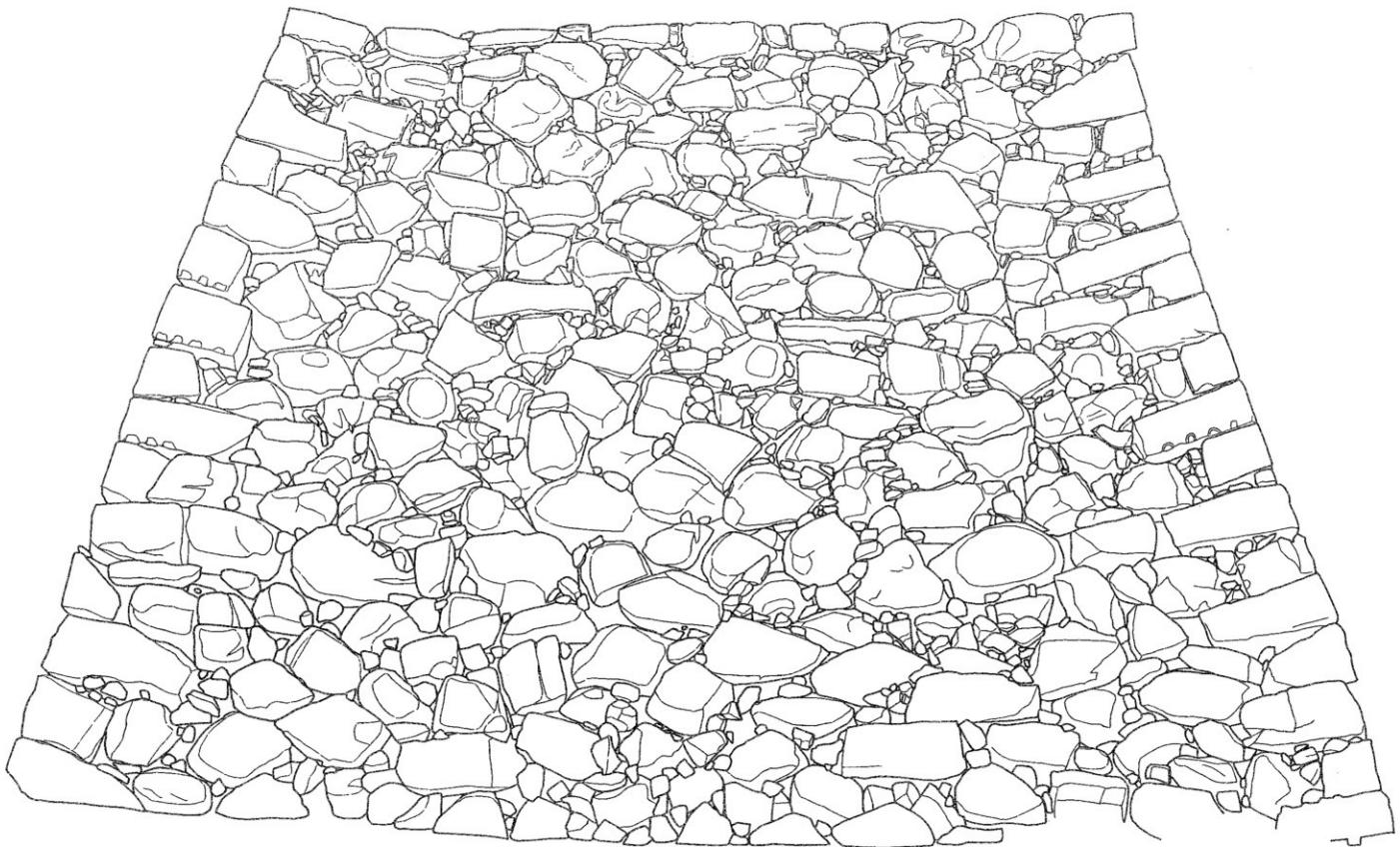
L = 1.000m

第4図 A面立面図 (S = 1/20)



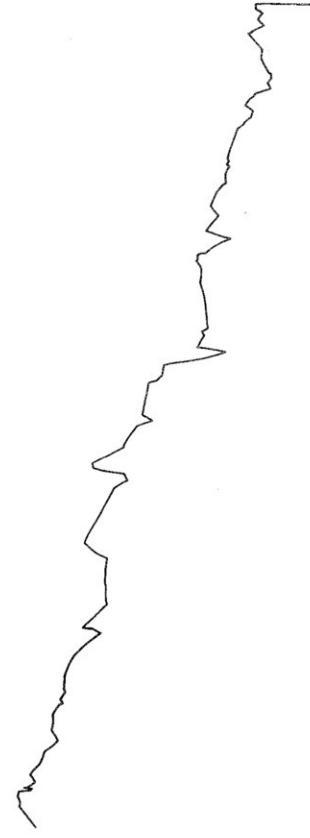
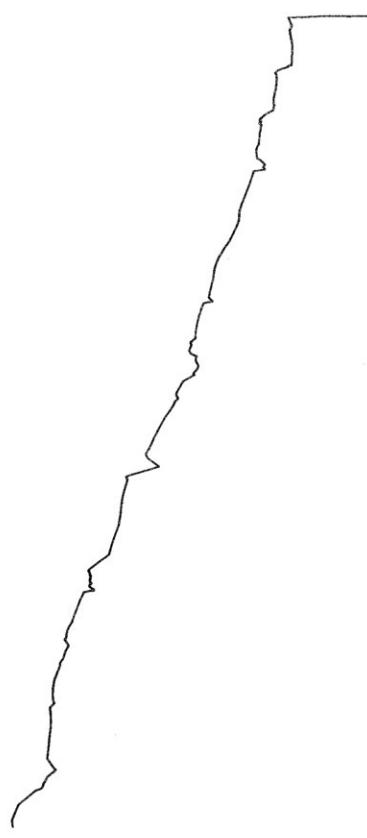
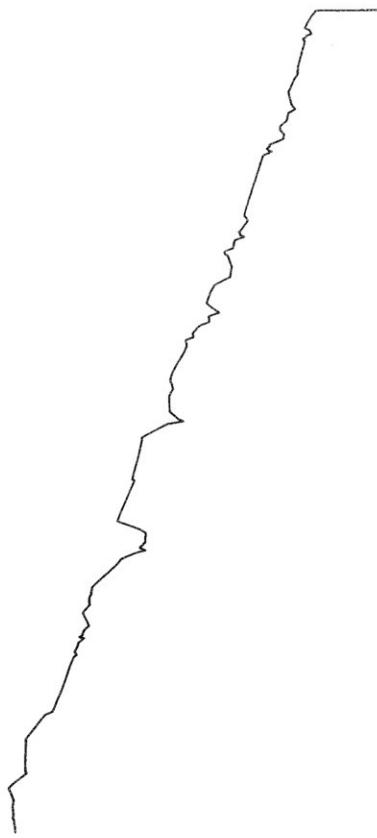
$L_1 = 0.500\text{m}$

第5図 B面立面図 ($S = 1/20$)

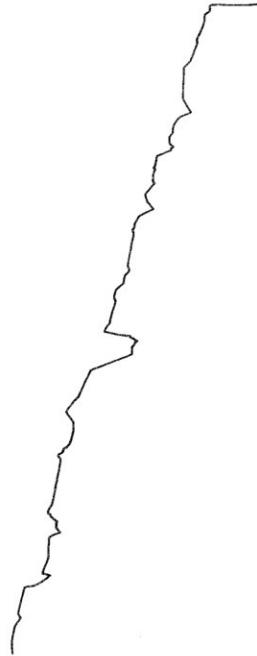


L = -0.500m

第6図 C面立面図 (S = 1/20)

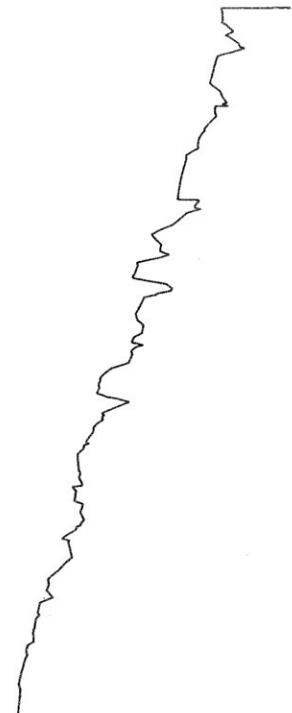


第7図 断面図(A, B-1, B-2) (S=1/20)



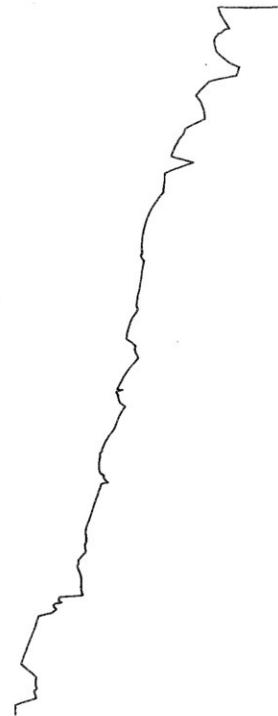
C - 1

$L = -0.500m$



C - 2

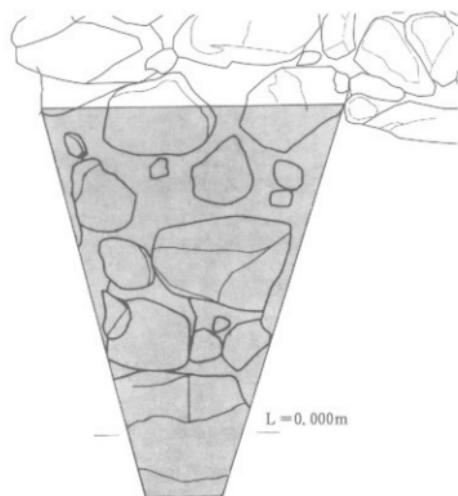
$L = -0.500m$



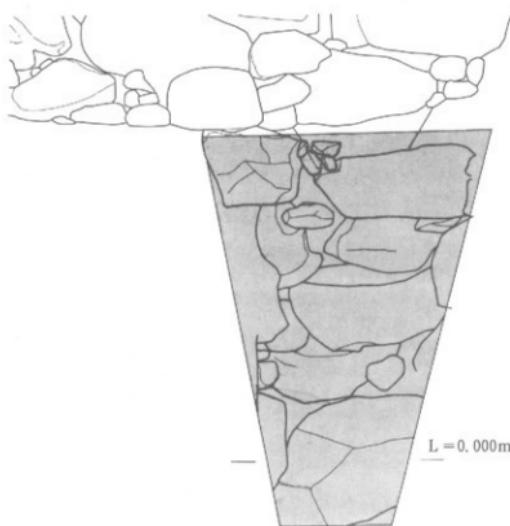
D

$L = -0.500m$

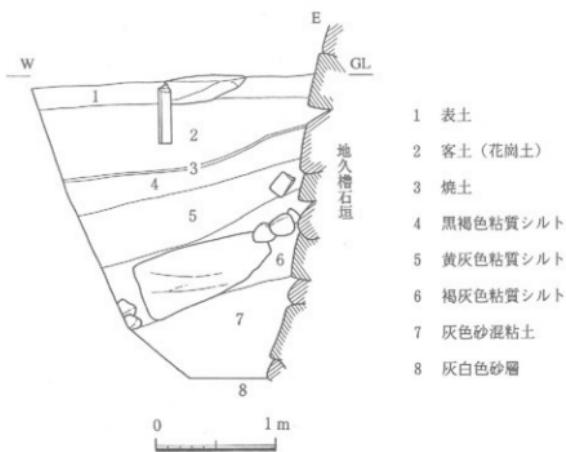
第8図 断面図 (C-1, C-2, D)



第9図 石垣北面試掘部立面図 ($S = 1/20$)



第10図 石垣西面試掘部立面図 ($S = 1/20$)



第11図 試掘部北壁土層断面図



地久櫻石垣検出状況

第3部 三ノ丸跡

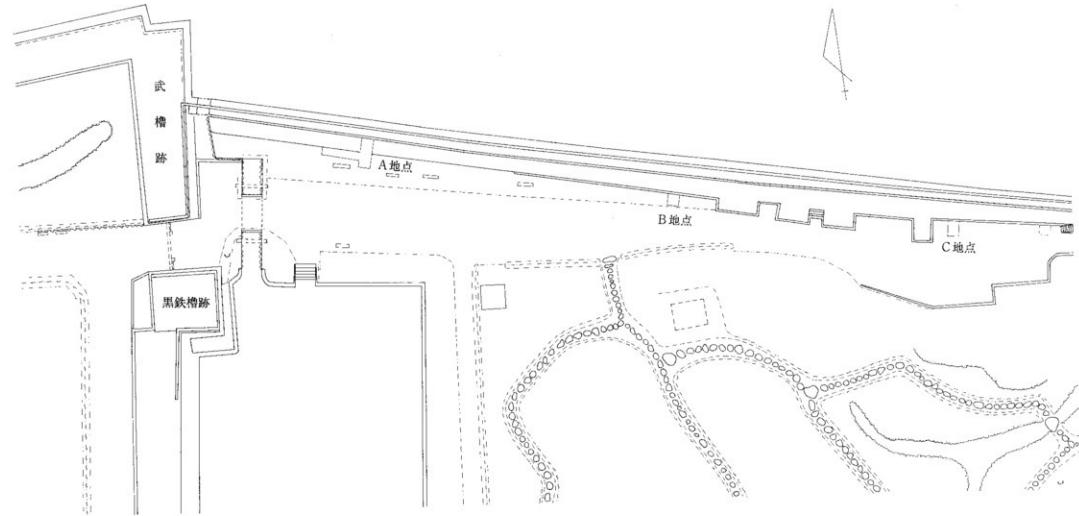
第1章 調査の経緯と経過

高松城跡三ノ丸跡は玉藻公園の北東部を占め、現在披雲閣、内苑などが所在する一郭である。西から南西部を内掘、東から南東を中掘によって区画され、西側は北辺部で二ノ丸跡とつながっている。北辺は外郭として直接瀬戸内海に接し水城という立地をよくものがたるものであったが、明治30年代以降数次にわたる高松港整備による埋め立てのため現在では国道と埠頭によって海と隔てられている。天正15（1487）年の生駒氏創建当初の造成以来、松平氏入府後の寛文年間に東ノ丸、北ノ丸等の新郭、月見櫓等が周辺部に新設されたことを別にすれば三ノ丸では普請のうえでは大きな手は加えられていないと考えられる。一方、三ノ丸郭内の建物配置や石垣、塀、櫓等の様子については不明確な部分が多く、寛永4（1627）年の『讃岐探索書』に東南隅に二重の“矢倉”（櫓）とこれに続く30間の多聞、海側の“矢倉”（櫓）と塀の存在が記録されている程度にとどまる。

石積みの現状としては、城内側では三ノ丸東端の渡櫓付近で下段約1m、上段約1.6mの2段石垣を築いており、下段上面の犬走りの幅は2～2.5mを測る。このうち下段の石垣は西へ向かうにつれて徐々に高さを減じ、三ノ丸北辺の東から3分の1（内掘水門から東へ33m）付近で地面高と同レベルまでに下がってしまう。一方、地盤高自体は西へ向かって高くなってしまい、三ノ丸の東西両端で約35cmの高低差を測る。上段石垣の上面は幅1.2mほどの犬走りになっており、反対側は、往時は海面から屹立していた城外の高石垣と背中合わせになっている。

上段石垣の上部には、主に玉藻公園の防犯を目的としてのことと考えられるが、コンクリートによる下地塗りの上に花崗岩ブロックの塀が築かれていた。史跡の景観保全の観点からかねてより文化庁等などから撤去を求められていた物件であったが、平成7年1月の阪神大震災で塀と上段石垣の一部が崩壊したことを機会として撤去に踏み切った。一方、石垣についても地震崩壊以来積みなおしに向けて協議等を重ねてきたが、このたび石垣崩壊箇所の修復工事を実施するにあたり、香川県教育委員会ならびに文化庁から石垣基礎部の構造、主には胴木丸太の存在の如何について試掘確認調査を併せて実施するよう指導を受けたため、今回の調査実施となったものである。

調査期間は、平成10年7月8日から8月11日までの約1ヶ月間を要した。



第12図 調査地点位置図

第2章 調査の成果

試掘調査では第1図位置図のように3ヵ所の試掘トレンチを設定し、西からA～C地点として順次調査を進めていった。

(1) A地点の調査

水門西方17m付近に調査区を設定した。三ノ丸北東隅に位置する渡櫓から2段に築成されていた三ノ丸北側石垣の下段が次第に段差を減じてトレンチ東方16m付近で消滅してしまうため、上段石垣裾部に接してA地点トレンチを設定した。広さは東西幅1.5m、南北長は当初3mで設定したが、遺構の広がりにしたがって2回にわたって拡張した結果、最終的に4m、実掘面積6m²である。A地点掘削後、検出した石垣（埋没石垣）の西延長部を確認するため、上段石垣裾部より南へ2mの地点から西へ東西長5m、南北幅50cm、実掘面積3m²のトレンチを拡張し、A地点の調査面積は最終的に9m²となった。

基本土層は調査区西辺を図示した。第1層は現表土層である。第2層以下は埋め殺しの松根株の影響もあって若干攪乱気味になっているが、第2・3層は砂礫と瓦片を大量に含む締まりの悪いシルト層である。遺物による年代観が明確に示せないが、近世末あるいは近代の整地層と考えられる。第4・5層も瓦片等を多く含む整地層で黄褐色の砂礫混じりシルト～粗砂質の埋土である。第6層は小～中円礫を多く含む黄褐色の粗砂層で、一転して遺物を殆ど含まないことから高松城造成前の海砂利層と考えられる。第7層は現上段石垣の基底部に厚く堆積し、埋没石垣の石積みの背後にも部分的に確認できることから石垣築成の際に裏込めとして用いた土砂と考えられる。

上段石垣裾から南へ2.3m離れた位置に南向きに面を合わせた石垣（埋没石垣）を確認した。石垣は、調査区幅1.5mの間に基底部の1段4石が残存しており、調査区外にも続いているものと思われる。現に、埋没石垣西延長上には上面にのみ跡を残した花崗岩数石が石列状に地表面わずかに露出している。埋没石垣の基底部レベルは上段石垣裾部の地面から110cm下、標高で2.2mを測る。石材の大きさは最大のもので幅70cm、高さ50cm。石材は花崗岩と見られ、比較的小振りな石の中には安山岩も確認できた。

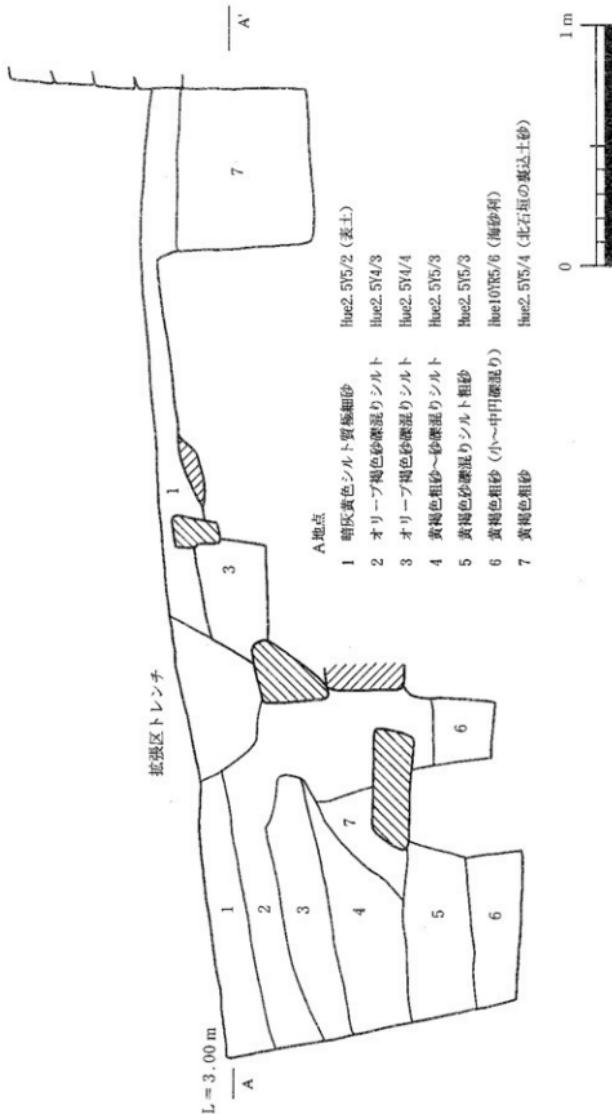
埋没石垣背面には、埋没石垣前面から後方約1mの範囲で安山岩割石、瓦片などが黄褐色の海砂とともに充填されており、石垣の裏込め材として用いられたものと考えられる。

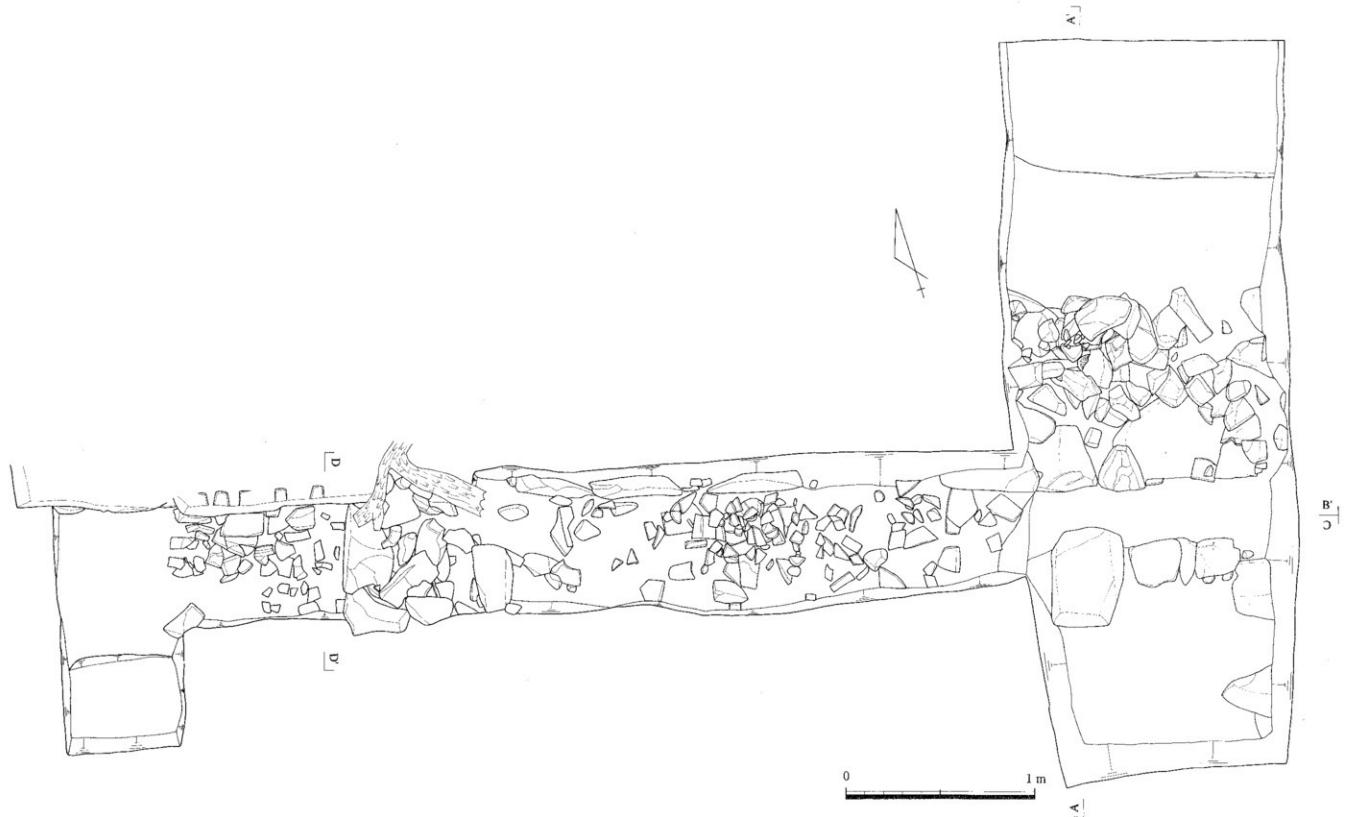
埋没石垣のさらに南側には、埋没石垣と30cmの間隔をおいて北に面を合わせる石列の基底石が確認されており、この基底面も標高で2.2～2.3mを測る。埋没石垣の裾部に設けられた排水溝等の一部と考えられるが、排水溝の底部を構成するべき貼り石、貼り土等の痕跡は確認できなかった。

一方、上段石垣裾部の状況は、先述した黄褐色の海砂層直上にはほぼ現地表面レベルから石積みがなされており、基礎構造物となるような石材、整地層、木材等は一切確認できなかった。

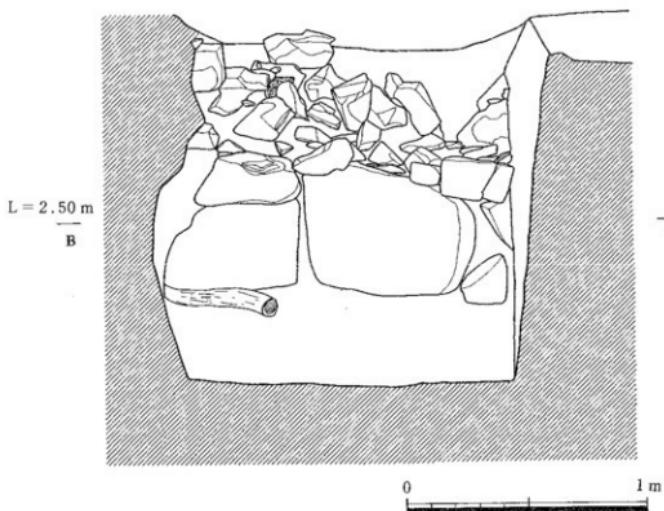
埋没石垣の西延長線上の地面には、A地点から6～7mにわたって長さ1m弱の石材が列石状に露出していることから、これと埋没石垣の関係を確認する目的で西側に枝状にトレンチを拡張し、石垣前面と思われる南面の確認をめざした。しかし、石列の前面（南側）には地表下約30cmに濃密な瓦の包含層が存在しており、小規模な確認調査のレベルでこれらの全掘を実施することは躊躇さ

第13図 A 地点 土層略図

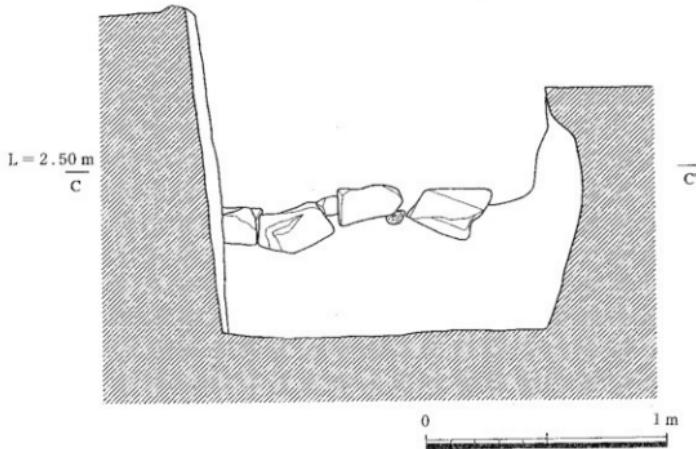




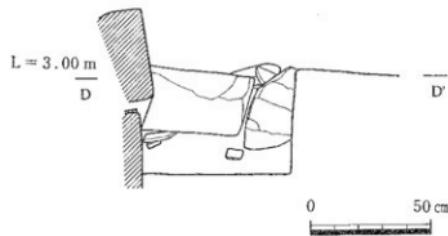
第14図 A 地点 遺構 平面図



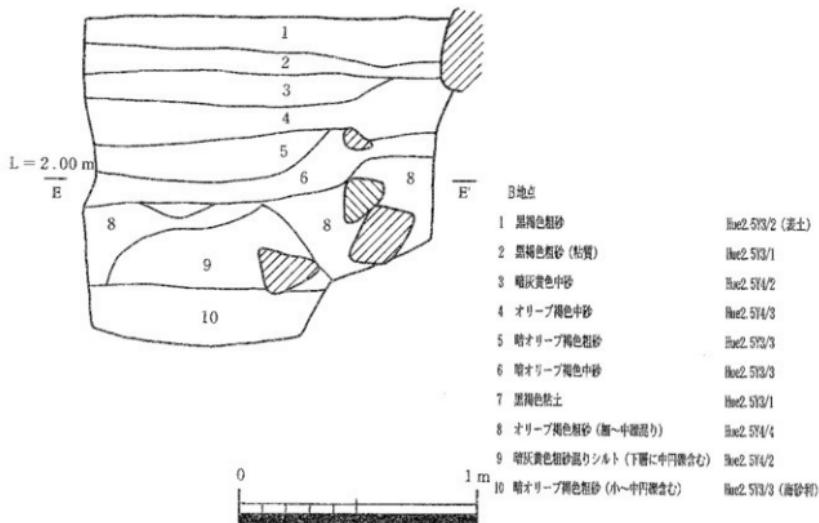
第15図 A地点埋没石垣北側壁面図



第16図 A地点埋没石垣南側壁面図



第17図 A地点西拡張区埋没石垣横断面図



第18図 B地点土層図

れたため、基底部の確認にまでは至らなかった。この瓦については、当初排水溝状の遺構の底部を構成するものと予想したが、土層断面等の状況から最終的には廃棄瓦を含む土砂による整地層と判断した。この結果、石材の大きさやのみ跡等加工痕の存否に相違はあったものの、埋没石垣と石列が一連のものであるという確認はできたと考えられる。

また、拡張区の東から3.5m付近では、西側を正面にとって石列から南へ直角に分岐する石列状の遺構を確認した。拡張区の幅が狭かったため確認した石材は2石のみで高さ25cmばかりの低いものであったが、いずれも先に整地層混入遺物と認定した瓦の上面から立ち上げていることから時期的にはそう古い遺構ではないと考えられる。

さらにつけ加えると、埋没石垣の東延長線は位置的には下段石垣とほぼ一致すると思われるが、後述するようにB、C地点の下段石垣が石材を斜めに組み上げて構築するいわゆる落とし積みという手法を用いており、石材表面の剥離面等も風化が未進行で新鮮なものであることから、埋没石垣と下段石垣は全く別のものと判断した。

(2) B地点の調査

A地点トレントから東へ55mほど離れた地点で、今回修復を予定している崩壊部分のすぐ下段にあたる。下段石垣裾に接して長さ幅ともに1.5m、実掘面積2.25m²の範囲を開発掘した。A地点と同様に調査区西辺を基本土層として図示した。第1層は現表土層、第2～6層は中～粗砂層のほぼ規則的な堆積となっており人為的な整地層と考えられる。第7層はブロック状に存在する黒色粘土。第8層以下は海砂利質の粗砂層であるが、8・9層の堆積に乱れがあることからこれらについては人為的な整地によるものかもしれない。

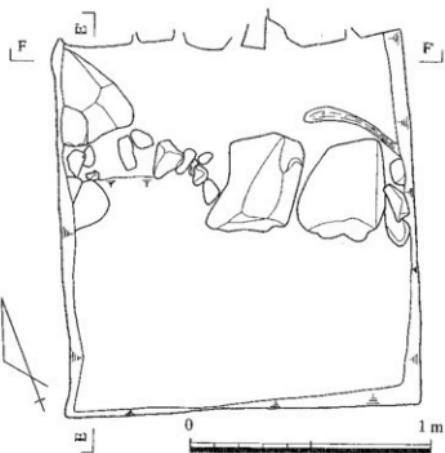
下段石垣裾から80cm南に、南面すると思われる石垣の基底石を確認した。基底石は幅30～40cm、高さ20～30cm、奥行き40cmほどの砂岩質の2石と裏込めまたは間詰めと見られるもの数個が残存しており、2つの主石は小口面を南側（石垣？正面）に向けて置かれていた。基底面の深さは地表下120cm前後、標高では約1.6mを測る。

また、この箇所での下段石垣の基礎部は、地表下40cmが基底面となっており、基底面以下の土層は上位から第4・6・8層（土質等については西面土層と同じ）、基礎構造物と認められる造作は一切確認できなかった。下段石垣の石組みは、長方形または方形に粗加工した石材を横長く置く部分と斜め方向に、いわゆる落とし積みに築き上げる部分が混在しており相対的には新しい様相をしていると思われる。

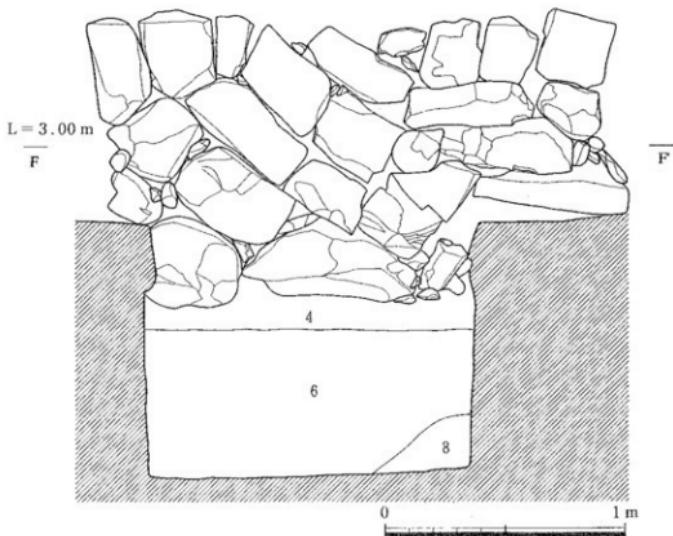
(3) C地点の調査

渡槽から20mほど西寄りの下段石垣裾に幅1.5m、長さ2m、実掘面積3m²を発掘した。

基本土層は西面と南面を図示した。第1層は現表土層、第2～4層は粗砂から細礫混じりのシルト層である。これら4層は現下段石垣の裾部を埋める層で、現石垣構築後の人為的整地層と考えられる。第5・6層はいずれも黒褐色の粗砂～細礫混じりシルト層で、今回の調査で確認した集石層を被覆している。後述するようにこれらの集石は埋没石垣の裏込め材と考えられるため、第5・6層は埋没石垣廃絶後の整地層と考えられる。また、集石の南側には底幅20cm、上面幅60cm、深さ45cmほどの断面逆台形の落ち込みが見られ、内部に第14・15層とした粗砂層を充填しており、これが

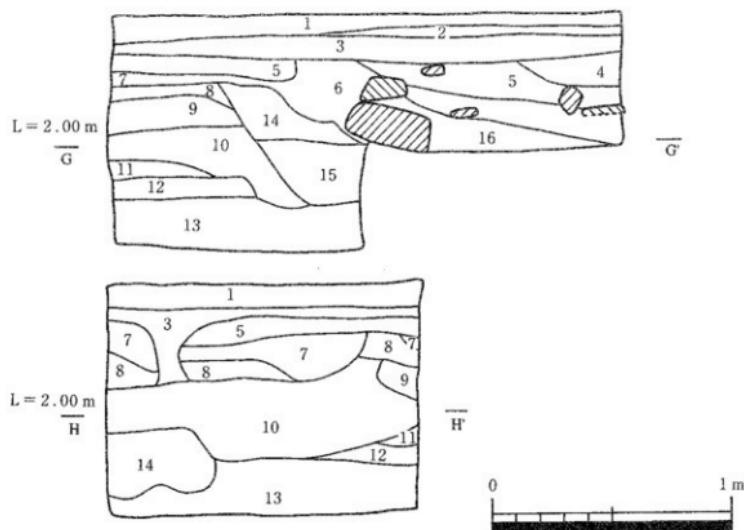


第19図 B地点遺構平面図



※ 土層注記は第7図参照

第20図 B地点現存石垣壁面及基底部土層図



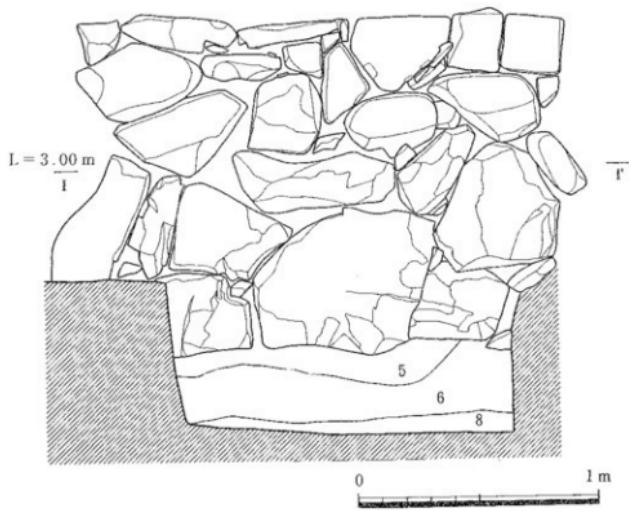
第21図 C地点土層図

C地点

1 黒褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y3/2	
2 オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3	
3 黒色シルト質極細砂	Hue2.5Y2/1	(現石垣構築後の整地層)
4 オリーブ黒シルト質極細砂	Hue5Y3/1	
5 黒褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y3/1	
6 黒褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y3/2	(埋没石垣石材抜取後の整地層)
7 オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3	
8 暗オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y3/3	
9 黒褐色中砂	Hue2.5Y3/2	
10 暗オリーブ褐色粗砂	Hue2.5Y3/3	
11 暗灰黄色粗砂	Hue2.5Y4/2	
12 暗灰黄色粘土	Hue2.5Y5/2	
13 暗褐色粗砂	Hue10YR3/3	
14 オリーブ褐色中砂	Hue2.5Y4/4	(埋没石垣石材抜取後の流入土)
15 暗灰黄色粗砂	Hue2.5Y4/2	
16 黒褐色粗砂	Hue2.5Y3/2	(埋没石垣の裏込土)



第22図 C地点遺構平面図



※ 土層注記は第10図参照

第23図 C地点現存石垣壁面及基底部土層図

埋没石垣石材抜き取り後の流入土または埋め立て土と考えられる。第7～12層はいずれも締まりの悪いシルト質または粘土質の堆積で人為的な整地層と考えられる。第13層は海砂利質の粗砂層、第16層は埋没石垣背面の裏込め層と考えられる。

遺構としては、下段石垣裾部から南へ1.3mまでの範囲で裏込め材と見られる安山岩割石や瓦片が濃密に確認できた。石垣となるべき石材は確認していないが、土層断面から裏込め土石層のすぐ南側に石材の抜き取り跡と見られる攢乱層の落ち込み（第14・15層）が見られ、当初はこの部分にも石垣が築成されていたものと推定できる。抜き取り跡から復原できる石垣は、現地表下75cm、標高で1.75m付近に基底部を置き、下段石垣から1.6m南に南面して築かれていたと考えられる。

また、この箇所での下段石垣の基礎部は地表下60cmを基底面とし、基底面下の土層は上位から第5・6・8層（西、南面土層注記に同じ）の順となっている。基礎構造物と認められる造作は一切確認できなかった。

第3章 遺物について

（1）A地点上段石垣出土遺物

1～10が見られた。1は肥前系磁器皿で、口縁端部を青い呂須により縁取られている。外面の染付は文様不明であるが、発色が良く、明治期以降のものと考えられる。2はサザエの殻である。調査区内に数多く見られた。3～7は軒平あるいは軒桟瓦の瓦当部分と考えられる。7は中央部に巴文をもつ。8・9は軒丸瓦の瓦当部分である。8は径が比較的大きいもので、巴文の頭が中央にあり、尾が長く延びるタイプのものである。珠文も小さく数が多い。織豊期にさかのぼるものと思われる。これに対し、9は巴文の尾は短く、珠文も大きく数が少なくなっている。10は丸瓦である。分厚くしっかりとした作りで、凸面のナデも精緻である。凹面にはコビキAが認められることから織豊期のものと思われる。

8・10のように高松城築城時にさかのぼる資料も見られるが、一番新しい時期をとり、明治期のものと考えられる。

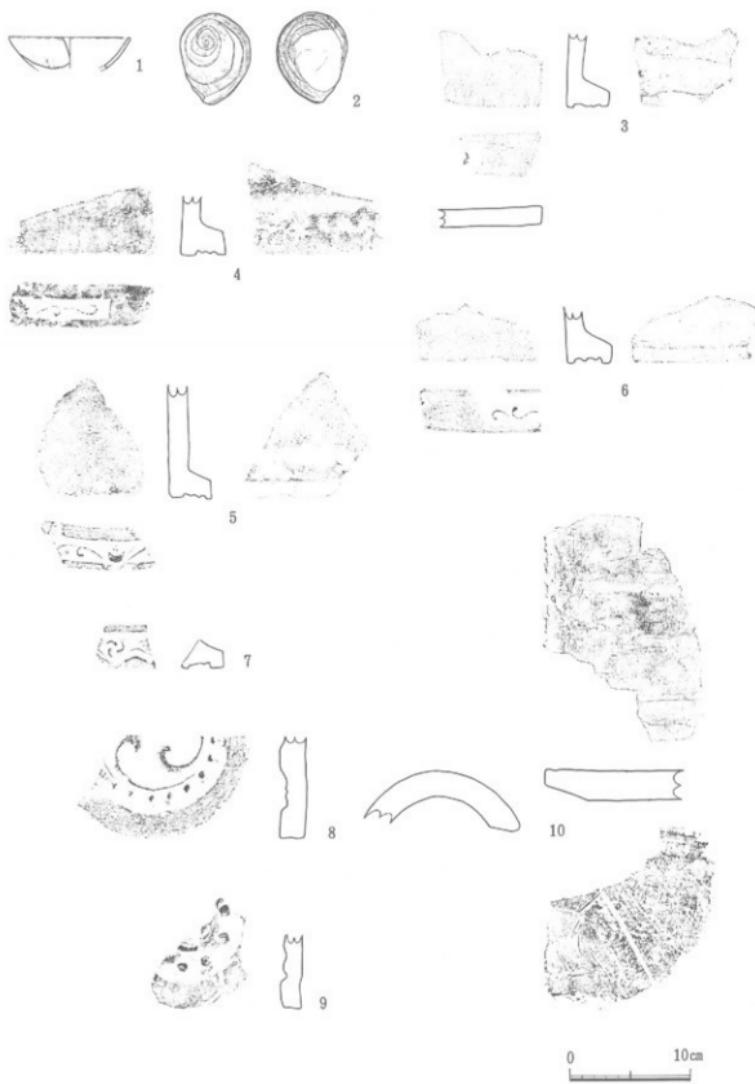
（2）A地点下段石垣出土遺物

11～14が見られた。11・12は軒平あるいは軒桟瓦の瓦当部分と考えられる。13は丸瓦である。凹面にはコビキBとゴザ目が認められる。14は土鍋である。内外面とも指頭圧が見られる。15世紀のものと考えられる。

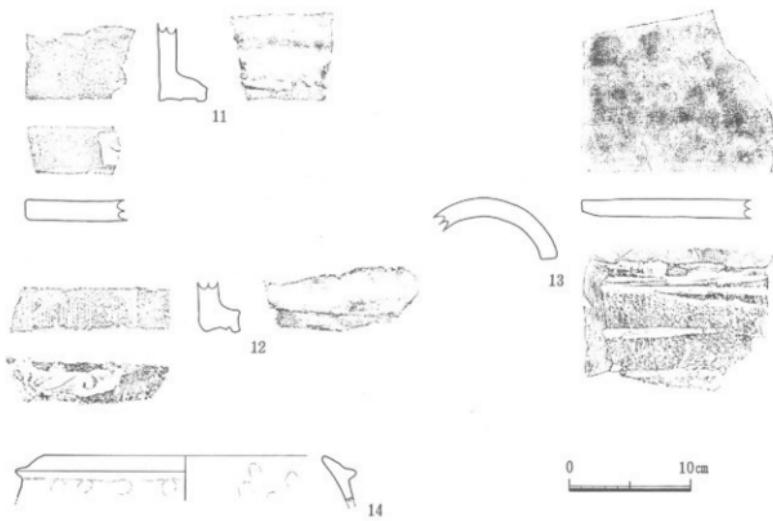
瓦のみで時期不明である。時期の判明する土鍋はおそらく周辺の遺構を削平したときに混じり込んだものと思われる。

（3）A地点西拡張区出土遺物

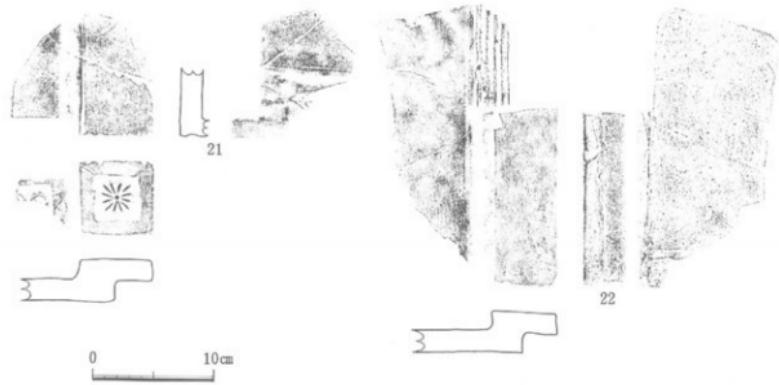
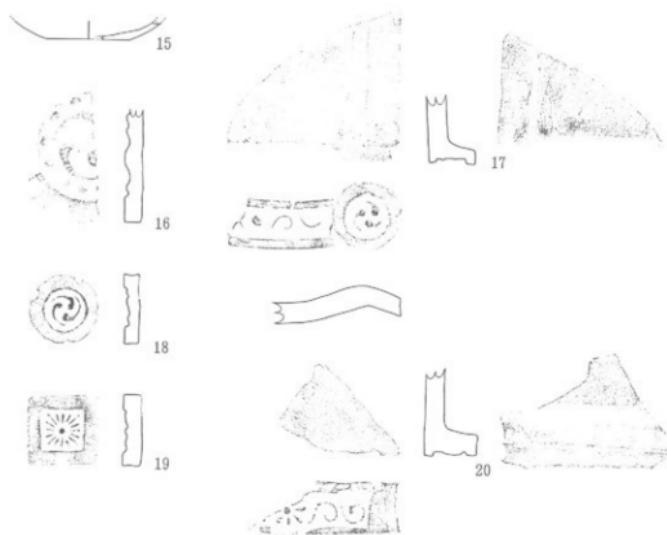
15～25が見られる。15は土師器皿である。16は軒丸瓦の瓦当である。巴も珠文も大きい。18～23は軒桟瓦である。17・18は瓦当部分に巴文が見られ、曲線的なつくりである。19～23は瓦当部分が四角く、小菊文をもち、直線的な作りである。24は丸瓦でコビキBが見られる。25は寛永通宝で



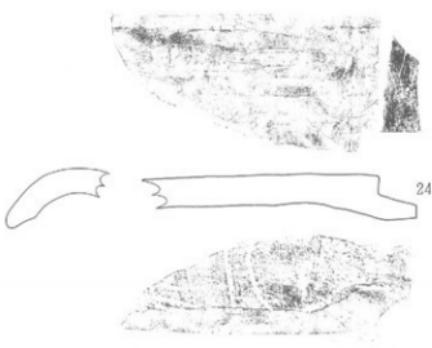
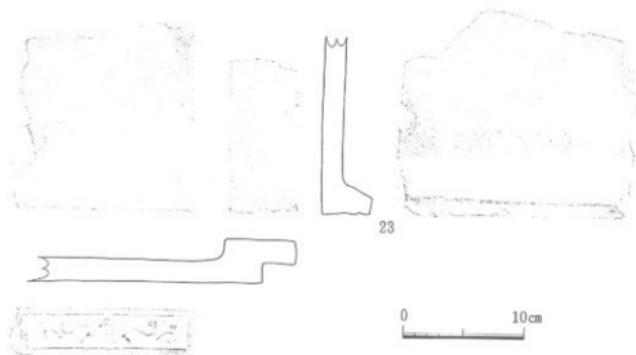
第24図 A地点上段石垣出土遺物実測図



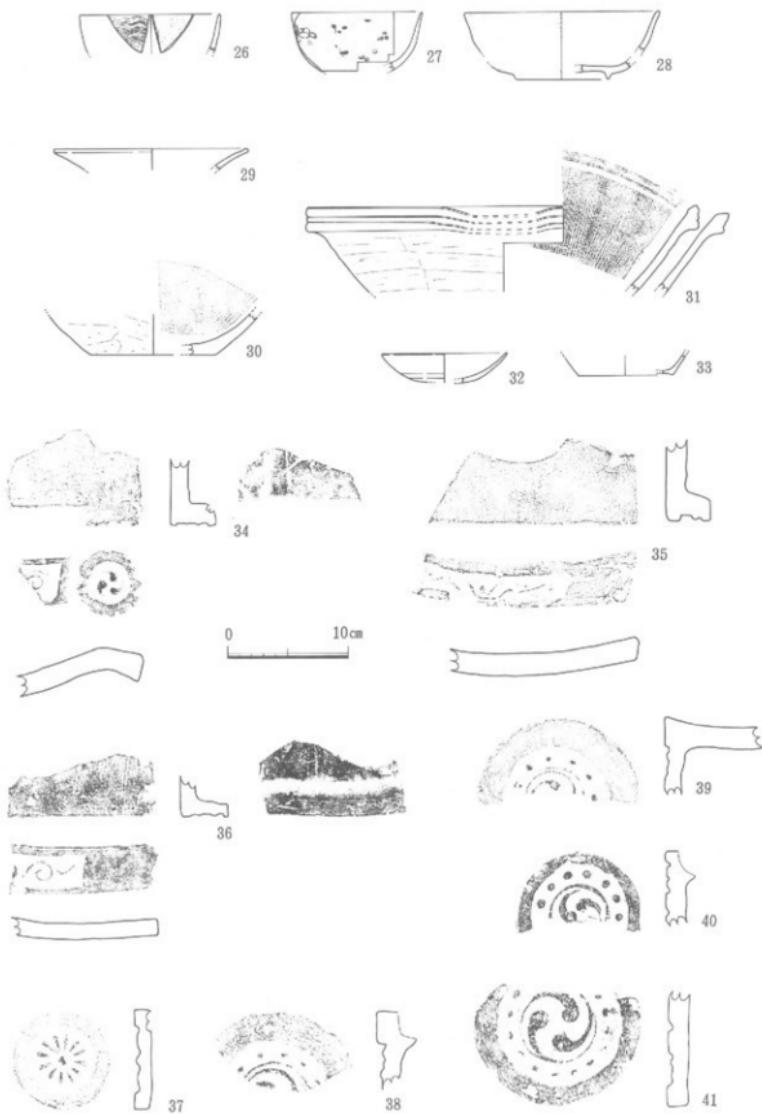
第25図 A地区下段石垣裏込出土遺物実測図



第26図 A地区西拡張区出土遺物実測図①



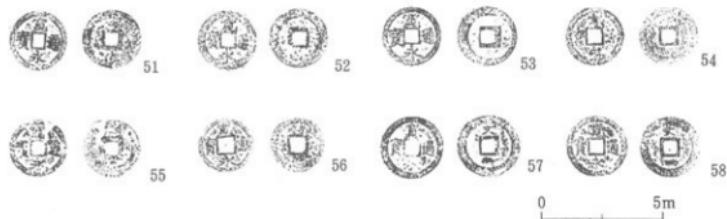
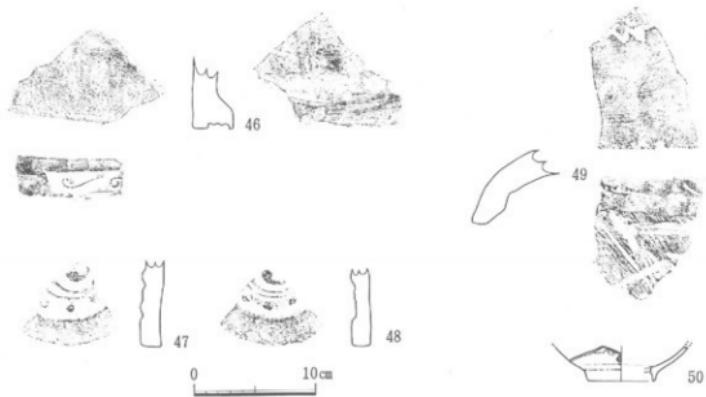
第27図 A地区西拡張区出土遺物実測図②



第28図 C地点埋没石垣裏出土遺物実測図①



第29図 C地点埋没石壇裏込出土遺物実測図②



第30図 C地点下層出土遺物実測図

ある。

これらの遺物についても瓦のみであるため詳細な時期決定はできないが、幕末頃のものと思われる。図示したもの以外にも明治期に下るものも見られた。

(4) C 地点埋没石垣裏込出土遺物

26～45が見られた。26・27は肥前系磁器碗である。27は外面に草花文が見られる。28は瀬戸美濃系の刷毛目皿である。29は肥前系陶器皿である。30・31は備前焼の擂鉢である。外面にはケズリが施され、細かい播目が見られる。31には片口が見られる。32は須恵質、33は土師質の皿である。34～36は軒桟瓦の瓦当部分である。37は小菊丸瓦である。38～41は丸瓦で、すべて巴文の尾はつながっている。40はやや珠文の数が少なく、大きさも大きくなっているものの、その他の珠文は数も多く小さい。42は平瓦あるいは棟瓦である。釘孔が1箇所認められ、中におれてさびた釘が付着している。43～45は丸瓦の玉縁部分である。すべて凸面はナデ、凹面はゴザ目が見られる。

軒丸瓦や肥前系陶器皿の年代は17世紀初頭頃までさかのぼれるが、その他の遺物については19世紀中頃のものと思われる。

(5) C 地点下層出土遺物

46～52が見られた。46は軒平あるいは軒桟瓦の瓦当部分と考えられる。47・48は軒丸瓦の瓦当部分で、両者とも巴文の尾はつながっている。49は丸瓦で、凹面にコビキAが見られる。50は肥前系磁器碗で、内外面に圈線を施す。51～58は寛永通宝で、57・58の裏面には「文」の文字が見られる。遺物が少ないため時期決定はできないが、層序から考えて裏込と同時期あるいはやや下るものと思われる。

第4章 まとめ

(1) 現存の北側石垣について

現存の三ノ丸北側石垣の築造年代を示す文献は今のところ確認されておらず、三ノ丸の具体的な建物の配置等についても今のところ明確ではない。しかし、寛永4（1627）年の『讃岐探索書』には現在では存在していない三ノ丸海側の“矢倉”（櫓）と堀の存在が記されており、昭和32年の『高松城二之丸月見櫓・續櫓・渡櫓・手御門修理工事報告書』には「…明治34年この周囲を約15尺の高位に埋立なし」と、三ノ丸海側において高松港造成のために当時の海面を高さ約4.5mにわたって埋立てたことが記録されている。また現在残っている北側石垣は、A・B地区背後の石積みをはじめとして落とし積みの技法が顯著で、B地点からC地点かけての石積みの一部にはまだ割れ口の新しい安山岩を用いた四方伐合せ積みが見られる。上段の石材について見ると花崗岩、安山岩を中心に用いており、中には砂岩、凝灰角礫岩なども混在している。石材は一辺20～50cmの矩形に粗加工されており、特に花崗岩に整形の度合いが著しい。下段の石垣では、用材の種類は上段と同様であるものの安山岩に比較的自然石が多く、花崗岩の整形材もたがねの痕跡を残すもの等があつて上段と一様ではない。これらから考えると、現在の三ノ丸北側石垣の築造（または最終の改修）時期は早

くとも幕末以降で、おそらくは高松港造成によって石垣の高さが目減りしたことによる積み足しと想像できる。

さらに、三ノ丸北側石垣の海側面の石積みを観察すると、現石垣の上端から1.6m下がりの部分を境として上下で石垣の積み方や用材の大きさに変化が見られ、それまで勾配をもって立ち上がってきた石垣面の傾斜もここ以上一気に直立してしまう。この1.6mという高さは北側石垣上段の現存高とも一致することから、積み足しは北側石垣全体を嵩上げしたものと断定できる。一方の下段石垣については、上段石垣とは用材等に若干の相違が見られることからこれまでには上段同様の新しいものとは明確には判断されていなかった。しかし、石積みの手法は基本的に共通しているため、時期的には上段石垣と同様期の構築と考えられる。石材の相違については、今回の調査によって下層から埋没石垣が出土したことから、既存の埋没石垣用材の転用を主とした下段と新たに外部から供給した用材の使用を主とした上段の違いが生じたものと考えられる。

(2) 埋没石垣について

今回出土の埋没石垣は、A地点では上段石垣裾から約2.3m、B・C地点では下段石垣裾からそれぞれ0.8m、1.3m手前で検出した。いずれも基底の1段を残すかまたは石材抜き取りの痕跡が残るほかは裏込め材の残存によって石垣であったことがうかがえる程度の遺存度であった。基底面（基底石下面）の高さはA地点から順に現地表下90cm、100cm、80cm、標高では同様に2.3m、1.65m、1.75mを測る。A地点の標高がB・C地点より比較的高いのは、高松城を中心の天守台を最高所として二ノ丸、三ノ丸と順次標高を下げてゆく繩張りをとっていたためで、A地点が二ノ丸により近い位置関係にあることに由来するものと考えられる。

埋没石垣の本来の高さは、A地点西拡張区の石列上面（標高は3.3m）を天端と考えると、A地点付近で1m前後の立ち上がりに復原でき、B・C地点も同程度の高さを有していたと考えられる。抜き取られた石材は現下段石垣の石材などに転用されたものであろう。埋没石垣上部の構造や構造物（多間櫓、塀など）の有無についてはこの調査では確認できなかった。また、埋没石垣の壁面と海側へ向けた石垣面の間隔はA地点では約4m、B地点で4.8m、C地点では5.6mであった。これはそれぞれ1間を1.9mで換算すると2間、2.5間、3間の値に近似しており、これからも石垣の遺構としての蓋然性が高くなってくる。

(3) 石垣基底部の基礎構造

今回確認を目的とした石垣基底部の基礎構造（石材、整地層、木材等）については一切確認できず、石垣の基根部自体がほとんど地中に入っていない状況であった。これは、現存の北側石垣（上段・下段）が近代という、石垣に防衛的な意味が失われてしまった時代の産物であれば当然のことであろうが、下層の埋没石垣においても同様に目立った基礎構造物は設けられていない。これは、この部分の石垣が城の外郭や天守台、櫓台等のいわゆる高石垣ほど構造的、防衛的強度を必要としたかったためか築造時期の差異によるものか、今後の検討を要するところである。

遺物觀察表 No.1

番号	器 器	法 量	内 面(凹面)	外 面(凹面)	色 調	胎 土	焼成
1	肥前系磁器 蓋	口径10.0cm 器高 2.5cm		文様不明(染付)	灰色	密	良好
2	瀬戸内海産 サザエ						
3	軒 平 瓦		ナデ	ナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好
4	軒 平 瓦		ナデ	ナデ	N5/ 灰	密	良好
5	軒 平 瓦		ナデ	ナデ	7.5Y 7/1 灰色	密	良好
6	軒 平 瓦		ナデ	ナデ	7.5Y 6/3 にぶい黄	密	良好
7	軒 平 瓦				10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好
8	軒 平 瓦				NA/ 灰	密	良好
9	軒 平 瓦				NA/ 灰	密	良好
10	丸 瓦		コビキA	ナデ	NA/ 灰	密	良好
11	軒 平 瓦		ナデ	ナデ	NA/ 灰	密	良好
12	軒 平 瓦		ナデ	ナデ	NA/ 灰	密	良好
13	丸 瓦		コビキB、ゴザ目 ナデ	ナデ	NA/ 灰	密 (1mm以下の長石・ 雲母含む)	良好
14	土師質土器 土 鍋	口径23.1cm 器高 3.8cm	指頭圧痕	指頭圧痕	5YR 6/3 にぶい黄橙	密 (1mm以下の長石・ 雲母含む)	良好
15	土師質土器 皿	底径 6.7cm 器高 1.5cm	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y 5/2 暗灰黄	密	良好
16	軒 丸 瓦				10YR 7/2 にぶい黄橙	密	良好
17	軒 棱 瓦		ナデ	ナデ	NA/ 灰	密	良好
18	軒 棱 瓦				N3/ 暗灰	密	良好
19	軒 棱 瓦				N3/ 暗灰	密	良好
20	軒 棱 瓦				NA/ 灰	密	良好

遺物觀察表 No. 2

番号	器 帽	法 量	内 面(凹面)	外 面(凹面)	色 調	胎 土	焼成
21	軒 棧 瓦	口径10.0cm 底絶 器高 2.5cm	ナデ	ナデ	N3/ 暗灰	密	良好
22	軒 棧 瓦		ナデ	ナデ	N4/ 灰	密	良好
23	軒 棧 瓦		ナデ	ナデ	N3/ 暗灰	密	良好
24	丸 瓦		コビキB	ナデ	N4/ 灰	密	良好
25	寛永通宝						
26	肥前系磁器 碗	口径11.4cm 器高 3.2cm	刷毛目	刷毛目	透明	密	良好
27	肥前系磁器 碗	口径10.6cm 器高 4.8cm		草花文	透明	密	良好
28	瀬戸美濃系 陶 器 盆	底絶 7.7cm 器高 1.4cm	刷毛目	刷毛目	5Y 7/2 灰白	密	良好
29	肥前系磁器 皿	口径16.0cm 器高 1.8cm	施釉	施釉	2.5Y 7/1 灰白	密	良好
30	備前焼陶器 擂鉢	口径10.2cm 器高 3.3cm	摺目	ヨコヘラケズリ	10YR 4/2 灰黄褐	やや粗(1mm以下の石 英・長石含む)	良好
31	備前焼陶器 擂鉢	口径31.8cm 器高 7.0cm	摺目	ヨコヘラケズリ 重ね焼痕跡	5YR 4/2 灰褐	やや粗(1mm以下の石 英・長石含む)	良好
32	須恵質土器 皿	口径10.4cm 器高 2.3cm		回転ヘラケズリ 焼化	10Y 5/1 灰	密	良好
33	須恵質土器 皿	底絶 7.6cm 器高 1.8cm			2.5Y 6/2 灰黄	密	良好
34	土師質土器 皿		ナデ	ナデ	N3/ 暗灰	密	良好
35	軒 棧 瓦		ナデ	ナデ	N5/ 灰	密	良好
36	軒 棧 瓦		ナデ	ナデ	N3/ 暗灰	密	良好
37	小菊丸瓦				10YR 7/4 にぶい黄橙	密	良好
38	軒 丸 瓦				N4/ 灰	密	良好
39	軒 丸 瓦		コビキB	ナデ	N4/ 灰	密	良好
40	軒 丸 瓦				N3/ 暗灰	密	良好

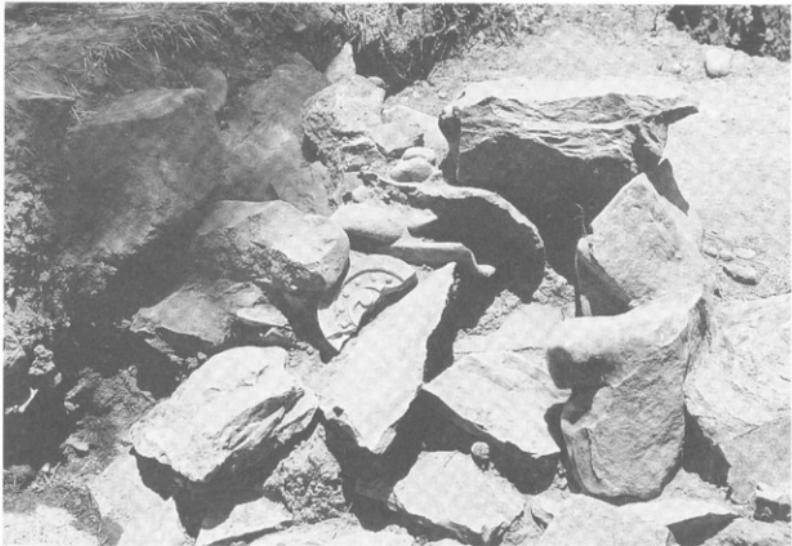
遺物観察表 №3

番号	器 器	幅 法量	内面(凹面)	外面(凹面)	色 満	胎 土	焼成
41	軒 丸 瓦				N3/ 暗灰	密	良好
42	平 瓦		ナデ	ナデ	5Y 5/1 灰	密	良好
43	丸 瓦		布目、ナデ	ナデ	N4/ 灰	密	良好
44	丸 瓦		コビキB、コザ目	ナデ	N3/ 暗灰	密	良好
45	丸 瓦		コザ目	ナデ	N6/ 灰	密	良好
46	軒 平 瓦		ナデ	ナデ	10YR 7/3 にぶい黄褐	密	良好
47	軒 丸 瓦				N5/ 灰	密	良好
48	軒 丸 瓦				10YR 7/2 にぶい黄褐	密	良好
49	丸 瓦		コビキA	ナデ	N4/ 灰	密	良好
50	肥前系磁器 碗	底径 5.4cm 器高 2.8cm	文様不明(染付) 圈線	文様不明(染付) 圈線	透明	密	良好
51	寛永通宝						
52	寛永通宝						
53	寛永通宝						
54	寛永通宝						
55	寛永通宝						
56	寛永通宝						
57	寛永通宝 (文錢)						
58	寛永通宝 (文錢)						

写 真 図 版



1-1 A区埋没石垣検出状況全景



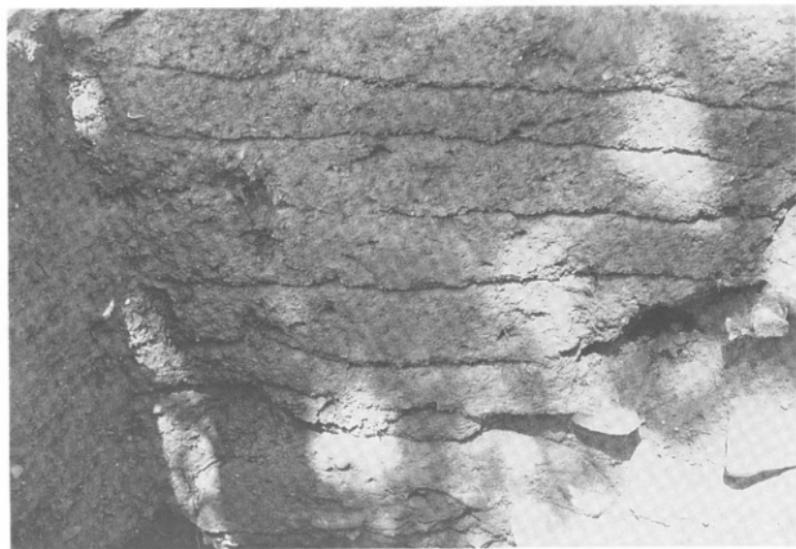
1-2 A区埋没石垣裏込中遺物検出状況



2-1 A区埋没石垣及裏込石検出状況



2-2 B区遺構検出状況



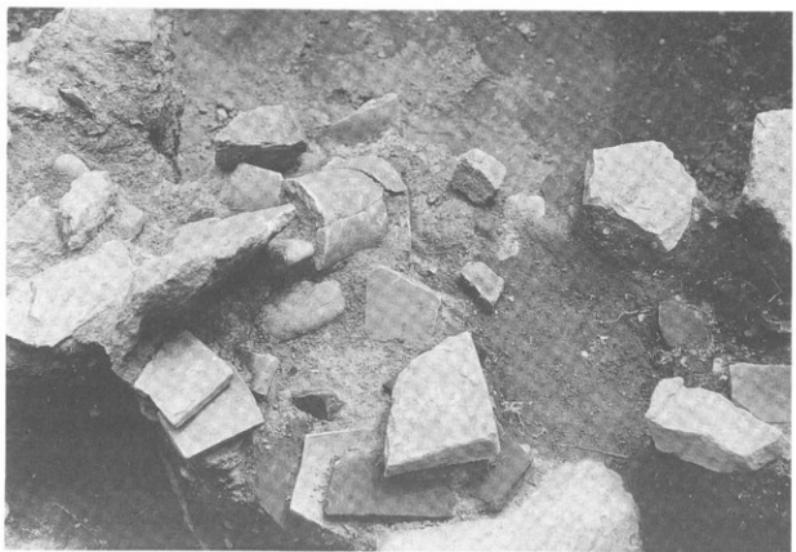
2-3 B区西壁土層堆積状況



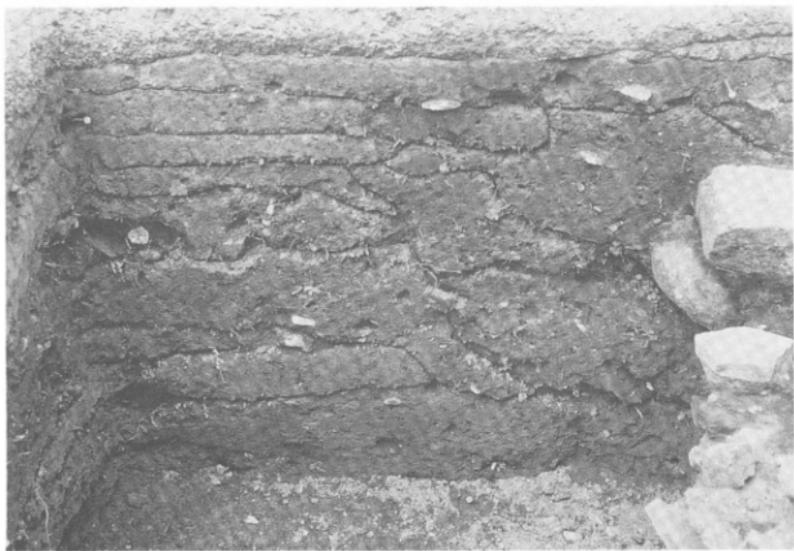
3-1 B区後方の石垣積みの状況



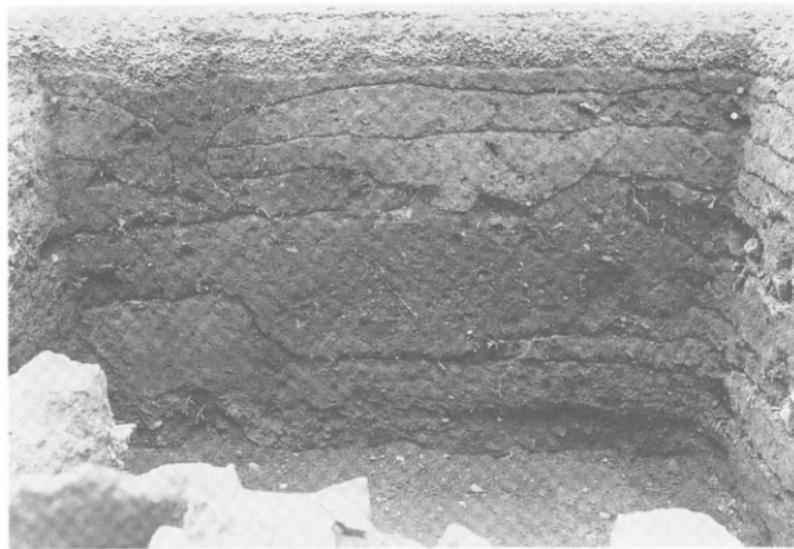
3-2 C区埋没石垣裏込石検出状況



3-3 C区埋没石垣裏込中の遺物検出状況



4-1 C区西壁土层堆积状况



4-2 C区南壁土层堆积状况



5-1 C区埋没石垣裏込部分土層堆積状況



5-2 C区後方石垣基礎部の状況



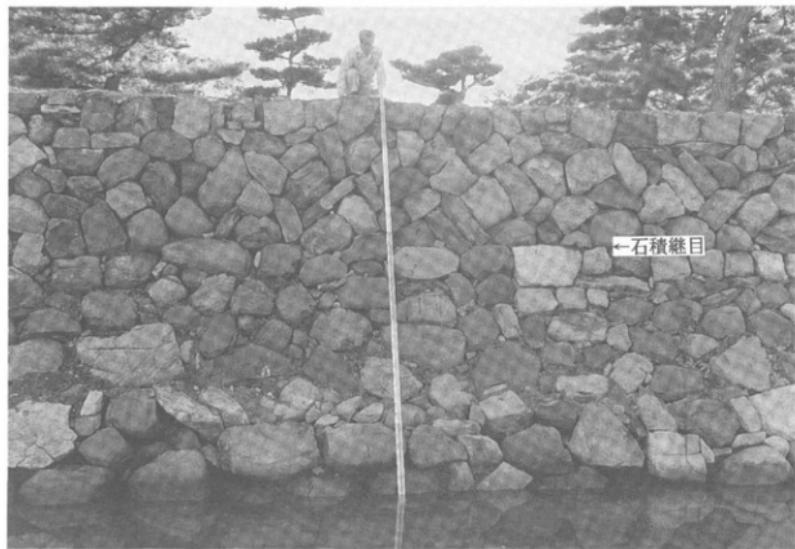
6-1 A区西拡張区遺構検出状況



6-2 A区西拡張区遺構部分拡大



7-1 A区上段石垣基礎部の状況



7-2 三ノ丸北側石垣北面の石垣積みの状況（B区背面付近）

付編第1部 香川県高等学校PTA会館立会

第1章 調査の経緯と経過

PTA会館建設に伴い、建設地が周知の埋蔵文化財包蔵地である高松城跡に位置することから、埋蔵文化財の取り扱いについて高松市教育委員会と事業者である財団法人香川県高等学校教育振興会との間で協議を行った。

開発予定地の南半分については、駐車場とすることにより掘削を伴わないと想定した。北半分の建築部分についても掘削を伴うのは基礎部分のみで、鉄筋コンクリート2階建であり、かつ掘削深度は80cmと比較的浅いことから遺構面に到達しない場合も想定できた。そのため、工事用に掘削を行い、遺構・遺物が検出されればその場で調査に切り替えていく工事立会の方法をとることで合意した。

工事立会は平成9年7月10日に行った。遺構・遺物の有無の確認及び土層堆積状況に注意しながら工事用の重機により掘削を行ったところ、地表面下約75cmにおいて遺構面を確認したため、工事に先立ち調査を行った。遺構密度も疎らであったため、調査は1日で終了した。なお、掘削が地表面下80cmまでであることから、それ以下については数面の遺構面が存在する可能性は高いと思われたが、埋蔵文化財に及ぼす影響はきわめて少ないと判断したため、調査も地表面下80cmまでとどめた。

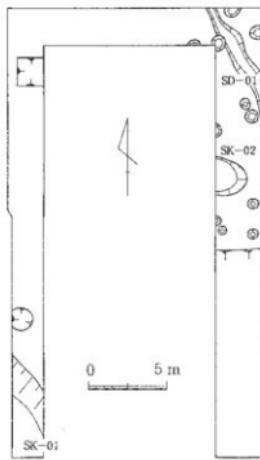
整理作業については平成9年8月1日～平成9年9月30日の間で行った。

第2章 調査の成果

(1) 基本層序

調査区北壁では、11層に分層できた。現地表面はバラスの客土、その直下で層厚20cmの高松空襲時のものと思われる焼土層が見られた。以下、第3層、第5層、第8層の整地土層が見られるが、すべて明治～昭和初期のものと考えられる。第10層の黒褐色粘質シルト層では、幕末～明治の陶磁器類が出土していることから、明治時代に堆積したものと考えられる。第11層の灰黄色シルト層は瓦片が多く含み、整地土層と考えられる。整地土層の上面では遺構が見られることから遺構面としてとりあげた。

第11層においても瓦片を含むように、地山はさらに深い位置に存在するようであるが、調査では第11層までしか確認していない。



第31図 調査区平面図



- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 客土(バラス) | 7. 焼土 |
| 2. 焼土(高松空襲) | 8. にぶい黄シルト(整地土) |
| 3. 青灰色砂混シルト(整地土) | 9. 褐灰色粘質シルト |
| 4. 褐灰色粘質シルト | 10. 黒色粘質シルト |
| 5. 黄褐色シルト(整地土) | 11. 灰黄色シルト |
| 6. 暗灰黄色粘質シルト | a 黒褐色粘質シルト |

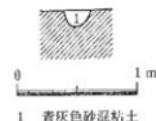
第32図 トレンチ北壁土層断面図

(2) 遺構と遺物

遺構面は前述のとおり現地表面下約75cmにおいての1面しか検出しておらず、遺構として、溝1条、土坑1基、ピット11基を確認している。これらの遺構は土坑1基をのぞいて調査区の東半にかたよってみられた。遺物は全体でコンテナ2箱分出土している。

S D - 0 1

調査区の北東隅で検出した溝である。幅0.20m、深さ0.15mを測り、検出部分の長さは3.00mである。埋土は青灰色の砂混じり粘土の単層で、断面形状は半円形である。溝の方向は現在の宅地の地割りとは斜行し、調査地の西側に推定される外堀の地割りと一致する遺物は1点も出土しておらず、時期は不明である。



第33図 S D - 0 1 土層断面図

S K - 0 1

調査区の南西隅において検出した土坑である。遺構は調査区外にのびており平面プランは確認できなかった。土坑は、深さ0.40mを測り、埋土は焼土混じりの暗褐色の粘土で、単層ある。断面形状はレンズ状を呈すると思われる。

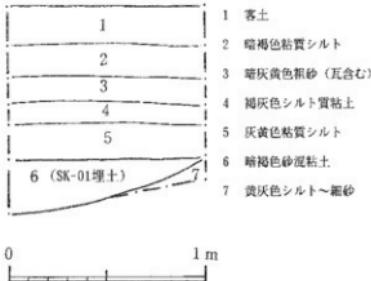
埋土中からは多量の瓦が投棄された状態で出土している。そのうち半数以上の瓦は火を受け赤変していた。遺物は瓦片がほとんどで、瓦以外の遺物は図示した2点のみで詳細な時期判断しがたいが、概ね18世紀後半から19世紀前半にかけてのものと思われる。

1は肥前系の染付碗である。外面には高台と腰部の2条の圈線をもち、体部には草花文が描かれている。内面は見込みに圈線1条と不明ながら文様が認められる。釉はやや青みがかった透明釉で、全面に施釉されている。2は短く直立した頸部にT字状に左右に拡張させる口縁をもつ壺である。口縁部上面に3条、体部外面に6条以上の凹線を施している。釉は内面が浅黄橙色、口縁部上面か

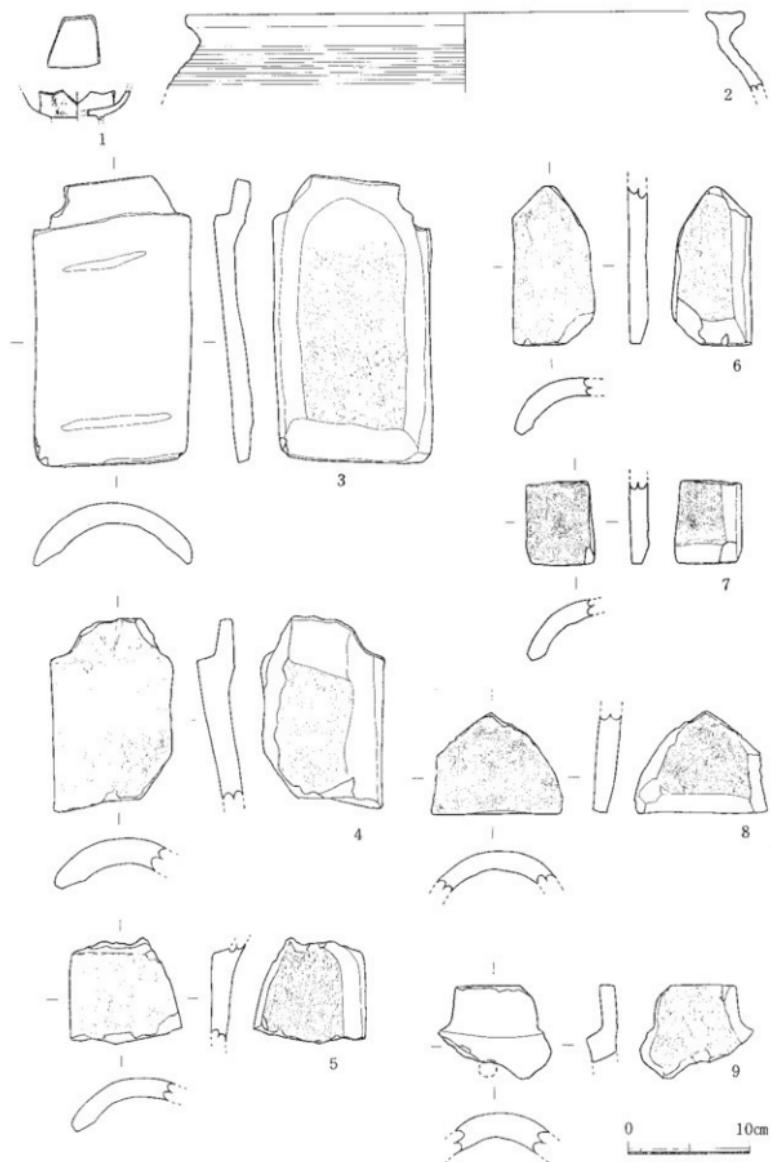
ら外面が褐色である。3～10は丸瓦である。3は完形で、やや斜めに曲がった粗雑な造りである。比較的小振りで、扁平な形態を呈する。凸面はヨコ方向のナデの後、タテ方向のナデが施されている。タテ方向のナデはやや雜でヨコ方向のナデを完全には消せていない。ナデを施した後、さらに強いナデによりヨコ方向に2条の凹線状のくぼみを施している。

凹面はゴザ目とコビキBが認められる。縁辺のケズリの幅は広く、雜である。4の凸面は3同様、ヨコ方向後タテ方向のナデであるが、タテ方向のナデは丁寧でヨコ方向のナデを完全に消している。凹面ゴ

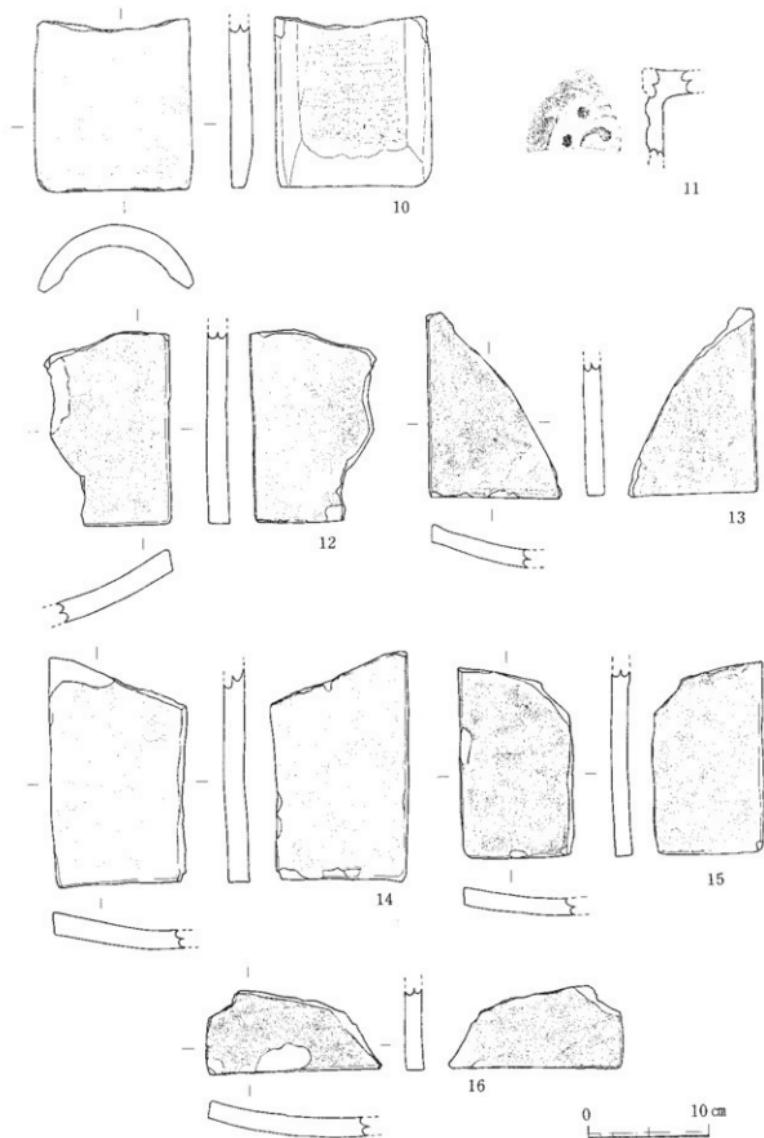
ザ目とコビキBが認められる。縁辺のケズリは一番幅広い。5の凸面はタテ方向のナデ、凹面はゴザ目が認められる。縁辺のケズリの幅は狭い。6は凸面においてタテ方向のナデ認められる。凹面はゴザ目と布目の両者が認められる。縁辺のケズリの幅はやや狭い。7の面はヨコ方向後タテ方向のナデ、凹面はゴザ目とコビキBが認められる。縁辺のケズリの幅は狭い。8は凸面のタテ方向のナデが顕著に認められる。凹面はゴザ目を不定方向のナデにり消しており、縁辺のケズリもケズリの後ナデを施している。全面にナデを施してはいるものの、外観は粗雑に見える。9は玉縁付近しか残存していないが、釘穴をもつ丸瓦である。Bが認められる。縁辺のケズリの幅はやや広い。11は巴文の軒丸瓦である。珠文はやや大きくまばらである。巴文もやや大きく、尾の巻き方は隣接する頭部まで伸び、それに接するような状況である。凸面はタテ方向、凹面はヨコ方向のナデを施している。12～22は平瓦である。全体に粗雑な造りのものが目立つ。12の凸面は不定方向のナデを施しており、ナデも雜である。凹面はヨコ方向のナデが認められる。13も凸面は雑な造りで、ナデは不定方向である。凹面はタテ方向のナデを入念に施している。14は凸面がヨコ方向後タテ方向のナデ、凹面がヨコ方向のナデである。15は凸面がタテ方向のナデ、凹面がヨコ方向後タテ方向のナデである。16の凸面はタテ方向後ヨコ方向の板ナデで、板状工具の圧痕が數カ所認められる。凹面のヨコ方向のナデも板ナデによるものと思われるが、ケズリ状の強いナデである。17は凹面凸面ともタテ方向のナデである。18の凸面はタテ方向のナデ、凹面はヨコ方向のナデ後縁辺のみケズリ状の強い板ナデで認められる。側面端部は面取りを施している。19の凸面はタテ方向のナデ、凹面はヨコ方向後クテ方向のナデである。20は凸面がタテ方向後ヨコ方向のナデ、凹面がヨコ方向のナデである。21は凸面がタテ方向のナデ、凹面がヨコ方向のナデである。22は出土瓦のうち最も粗雑な造りをしており、凸面のナデは特に不定方向で粗い。凹面はヨコ方向のナデである。側面端部はわずかに面取りを施している。



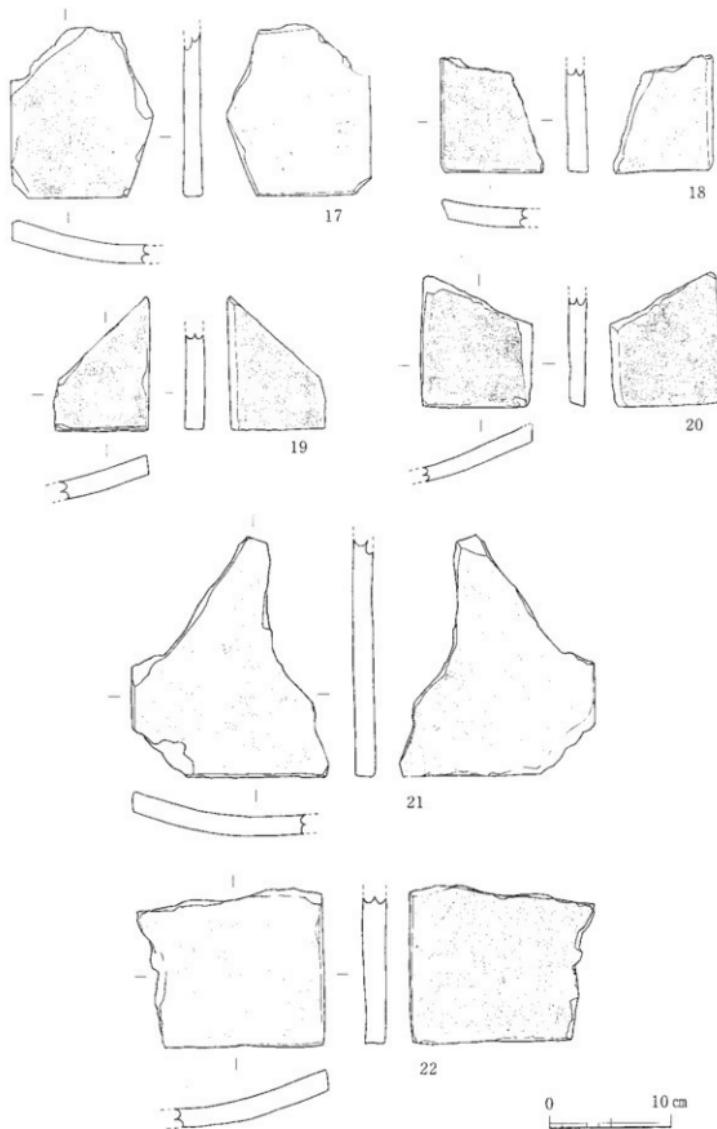
第34図 SK-01 土層断面図



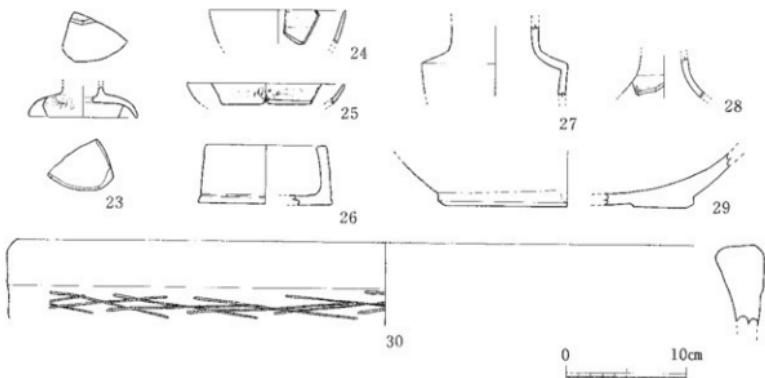
第35図 SK-01出土遺物実測図①



第36図 SK-01出土遺物実測図②



第37図 SK-01出土遺物実測図③



第38図 包含層出土遺物実測図

第3章 まとめ

今回の調査地は高松城の南西隅部分にあたり、外堀に接するような城内でも縁辺部である。現存する数多くの絵図等では、調査地は武家屋敷として描かれている部分である。今回の調査は、絵図等で知られるような武家屋敷等の検出が目的であった。

調査の結果、西側外堀に平行する溝（SD-01）を検出した。現在の地割りは南側外堀（現在＝兵庫町）の地割りの影響を受けているが、調査区周辺は西側外堀に隣接する部分でもあることから、幕末頃は現在の地割りからするとやや斜行した地割りである西側外堀の影響を受けていたことがうかがえた。

また、調査地では、柱穴を11基検出しているが、柱穴内には根石などは見られず、もちろん礎石なども存在しないことから、掘立柱建物であった可能性が高い。時期的に幕末あるいは明治に入るかもしれないが、城内においても縁辺部では掘立柱建物で生活を営んでいることが判明した。

今回の調査では、地表面下約80cmまでしか掘削がおよばないということで、幕末頃の遺構面を調査したに過ぎない。掘削深度以下については、香川県教育委員会や香川県埋蔵文化財調査センターが行っている周辺の調査例を見てもわかるように、数面の遺構面が存在すると思われる。また、小規模な調査のため、不明な点が多く、今後の周辺調査に期待したい。

遺物観察表 No. 1

番号	器 輪	法 量	内 面(凹面)	外 面(凹面)	色 調	胎 土	焼成
1	肥前系磁器 碗	口径 9.0cm 器高 2.5cm	圓線 文様不明(染付)	圓線、草花文	透明	密	良好
2	陶 器	口径 45.6cm 器高 6.5cm		凹線 4 条、施釉	褐色	密(2mm以下の長石・ 石英含む)	良好
3	丸 瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/ 灰	密	良好
4	丸 瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好
5	丸 瓦		ゴザ目	ナデ	7.5Y 5/1 灰	密	良好
6	丸 瓦		ゴザ目、布目	ナデ	N4/ 灰	密	良好
7	丸 瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	2.5Y 5/1 灰白	密	良好
8	丸 瓦		ゴザ目、ナデ ケズリ	ナデ	N5/ 灰	密	良好
9	丸 瓦		ゴザ目、複合痕	ナデ	10YR 8/3 浅黄橙	密	良好
10	丸 瓦		コビキB、ゴザ目 布目、紐の痕跡 ケズリ	ゴザ目、ナデ 複合痕	N4/ 灰	密	良好
11	軒 平 瓦		ナデ	ナデ	5Y 8/2 灰白	密	良好
12	平 瓦		ナデ	ナデ	10YR 8/3 浅黄橙	密	良好
13	平 瓦		ナデ	ナデ	N4/ 灰	密	良好
14	平 瓦		ナデ	ナデ	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好
15	平 瓦		ナデ	ナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙	密	良好
16	平 瓦		板ナデ	板ナデ、压痕	10YR 8/3 浅黄橙	密	良好
17	平 瓦		ナデ	ナデ	N5/ 灰	密	良好
18	平 瓦		ナデ、板ナデ	ナデ	2.5Y 7/1 灰白	密	良好
19	平 瓦		ナデ	ナデ	10YR 6/1 褐灰	密	良好
20	平 瓦		ナデ	ナデ	5B 5/1 青灰	密	良好

遺物觀察表 No.2

番号	器 帽	法 量	内 面(凹面)	外 面(凹面)	色 調	胎 土	焼成
21	平 瓦		ナデ	ナデ	2.5Y 8/2 灰白	密	良好
22	平 瓦		ナデ	ナデ	2.5Y 7/1 灰白	密	良好
23	瀬戸美濃系 磁 器 薩	口径 9.0cm 器高 2.6cm	草花文、圓線 2 条	草花文、圓線 3 条	透明	密	良好
24	肥前系磁器 碗	口径11.4cm 器高 2.8cm	斜格子文		緑	密	良好
25	瀬戸美濃系 皿	口径13.0cm 器高 1.7cm	文様不明	文様不明	透明	密	良好
26	備前焼陶器 鉢	口径10.0cm 底径10.1cm 器高 4.9cm			5YR 5/3 にぶい赤褐色	密 (1mm以下の石英・ 長石含む)	良好
27	磁 器 壺	器高 5.8cm			透明	密 (1mm以下の砂粒含 む)	良好
28	肥前系磁器 德 利	器高 3.3cm		草花文、圓線 2 条	透明	密	良好
29	瀬戸美濃系 陶 器 鉢	口径23.2cm 器高 4.6cm		高台無軸	7.5YR 5/2 灰オリーブ	密 (1mm以下の石英・ 長石含む)	良好
30	土師質土器 壺	口径62.0cm 器高 6.6cm	ナデ	斜格子文、ナデ 接合痕	7.5YR 7/3 にぶい橙	やや粗 (1~2mm以下 の石英・長石・角閃石 ・雲母を多量に含む)	良好

写 真 図 版



1 調査前全景



2 SD-01検出状況

付編第2部 三越増床試掘

第1章 調査の経緯と経過

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である史跡高松城跡に隣接し、江戸時代の絵図では外堀の内側になっており、武家屋敷が建ち並ぶ様子が描かれている地域である。

平成9年8月、三越高松店は既存建物の東側約3,000m²について店舗の増床を計画しているとを発表した。これを受け三越高松店との協議の結果、高松市教育委員会では当該地の埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を行うことになった。試掘調査は平成10年4月16日にい、トレンチ2本、計65m²について調査を行った。試掘調査費用については平成10年度高松内遺跡調査事業（埋蔵文化財国庫補助事業）から支出した。

第2章 調査の結果

調査対象地の西よりに南北方向のトレンチを2本設定し、バックホーの掘削によって地下構の確認を行った。

掘削トレンチの全体にわたって既存建物基礎および解体時の廃材が地表下50~70cmまで埋め込まれている。特に西側トレンチの北半は地表下1.20m以深まで客土の花崗土が入っており、遺構の残存は見込めない。解体整地層の下層の地表下40~50cmには断続的に焼土層がみられ、第2次大戦の高松空襲の際のものと考えられる。

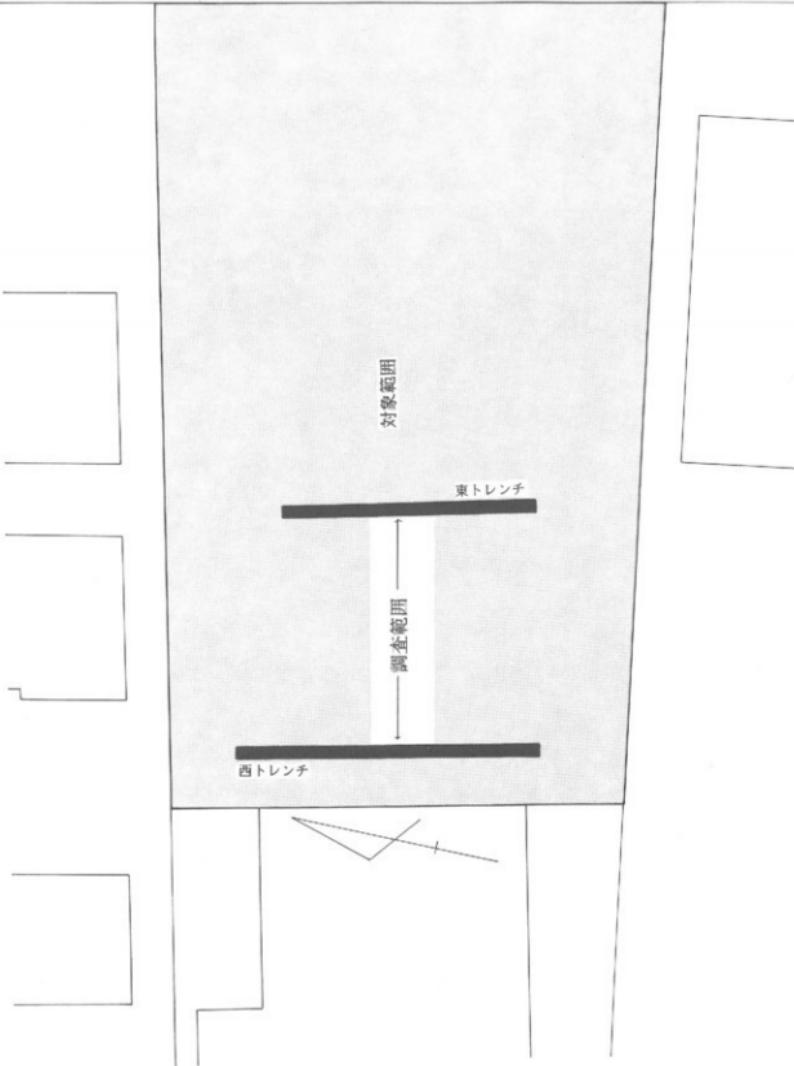
解体整地層および焼土層以下には黒色または黒褐色の客土層（瓦や陶磁器片が多く含み、客土層と考えられる）が堆積し、地表下1.20m付近で砂層またはシルト層の自然堆積層が出現する。

主に調査区の南半に広がる褐色または黄褐色の砂礫層は海砂の無遺物層で、城下町建物の基盤となる層と思われる。一方、黄灰色のシルト層は調査区の北半分を中心に分布していると思われ、東トレンチの北寄りではこの上面から7基のピットの掘り込みが確認できた。

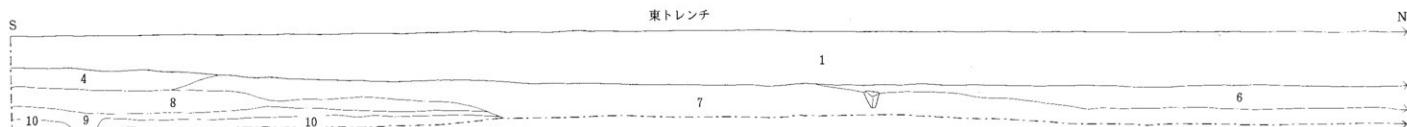
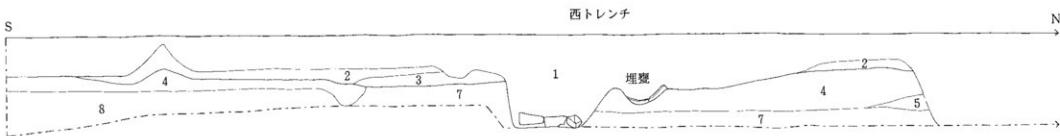
第3章 まとめ

今回の調査の土層観察によると、地表近くの50~70cmは既存建物の建設解体による整地層、第2次大戦時の高松空襲焼土層、その下層も瓦片等を含む2層の整地層が堆積しており、いずれも明治期以降の可能性が高い。地表下1.20m付近の褐色砂礫層および黄灰色シルト層自然堆積層と考えられ、砂礫層中には摩耗の激しい弥生土器片が数点みられるが、流れ込みによるものと思われる。また、シルト層上面には7基のピットが確認できたが、残存の深度が10cm前後とわずかで、配置も不規則に散在している状態であった。

以上の結果、この調査では明確な高松城の遺構は確認できず、開発に先立つ事前措置は必要ないと考えられる。



第39図 調査地位置図



- | | |
|-------------------|--------------|
| 1. 整地層 | 6. 黒色砂層（灰含む） |
| 2. 焼土層 | 7. 黒褐色シルト層 |
| 3. 黄灰色砂質シルト層（客土層） | 8. 褐色砂疊層 |
| 4. 黑色客土層 | 9. 灰色シルト層 |
| 5. 灰層 | 10. 黄灰色シルト層 |

第40図 トレンチ西壁土層断面図 ($S = 1/20$)

報告書抄録

ふりがな	しせきたかまつじょうあと (ちきゅうやぐらあと・さんのまるあと)						
書名	史跡高松城跡(地久櫓跡・三ノ丸跡)						
副書名	史跡高松城跡整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書						
卷次	1						
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第42集						
編集者名	山本 英之 大嶋 和則						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 高松市番町一丁目8番15号 TEL087(839)2636						
発行年月日	1999年3月						

ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高松城跡 (地久櫓) (地久櫓)	高松市玉藻町	37201		34° 20' 45'	134° 3' 10'	1997.12.3	4m ²	史跡整備
高松城跡 (三ノ丸) (三ノ丸)	高松市玉藻町	37201		34° 20' 50'	134° 3' 10'	1998.7.8 ~ 1998.8.11	14.25m ²	史跡整備
高松城跡 (西内町) (西内町)	高松市西内町	37201		34° 20' 45'	134° 2' 55'	1997.7.10	47m ²	香川県 高等学校 PTA会館
高松城跡 (内町) (内町)	高松市西内町	37201		34° 20' 35'	134° 3' 20'	1998.4.16	65m ²	三越
所蔵遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高松城跡 (地久櫓)	城郭	近世 近代	石垣		瓦			
高松城跡 (三ノ丸)	城郭	織豊期 近世	石垣		陶磁器、土師器、 瓦、寛永通宝			
高松城跡 (西内町)	城郭	近世 近代	住穴11、土坑2 溝1		瓦、陶磁器、 土師器			
高松城跡 (内町)	城郭	近世 近代			瓦、陶磁器			

史跡高松城跡

(地久櫓跡・三ノ丸跡)

史跡高松城跡整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成11年3月31日

編集 高松市教育委員会

高松市番町一丁目8番15号

発行 高松市教育委員会

印刷 サンプリント(株)